続・私の下町―姉の恋愛

福田善之

■登場人物

案内役（原田善彦、教師）
甲野友子
泰治（その弟）
島本（友子の夫、運送業）
咲（元「弓屋」の一員）
梅（同）
中之郷（咲の夫、飲み屋・材木屋経営）
林田（中国系マーケット振興会幹部）
先生（山内、小学校教員）
須藤（島本の元の仲間）
八代目さん（組長）
森泉源五郎（デザイナー）

組員甲（予科練）
組員乙（旋盤）
振興会A（王）
安西（泰治の元級友）
瑞恵（女子学生、泰治の女友達）
紘子（同）
刑事1・刑事2・振興会B・組員丙、他。
老婆（モク拾い、他）
浮浪児（老婆の連れ）
コーラス（雪子・月子・花子・露子）
歌姫。コーラスのリーダー。
見知らぬ少女・「小ゆみ屋」の馴染み客・島本運送の事務員、他。

開演前から、戦後、比較的初期の頃の歌謡曲類が聞こえている。

音質の悪い鉱石ラジオから流れてくるような。

1

四人の女性コーラスが歌い踊って場面をつなぎ、彩って行くこと「私の下町―母の写真」同様。ただし、それぞれが様々な人物に扮する度合いは前回以上。まず出だしは彼女たちがそれぞれ、シューシャンボーイ・娼婦・花売り娘などの姿だ。

はじめの歌は、戦後初期を思わせるものがいい、たとえば「東京キッド」のような。

案内役が、ぶらぶらと来る。今回は素姓・職業をあきらかにしよう。彼は初老の教師で、この芝居の間、それは変わらない。くたびれた服装で、鞄を持って。

案内役　夢を見ています、いつも……いまから、二千と何百年の昔、中国の戦国時代に、荘子という人がいました。彼の蝶の話、ご存じでしょう。昔、荘周、夢に胡蝶となる。自分は蝶々。花から花へ蜜に惹かれて舞い狂う。人間だった昔が、ぼんやり遠い夢のようで……で、目覚めてみると、夢。（自分をつねる）痛い。まぎれもない。蝶だった自分は夢だった……でも、そこでいつもやはり不安になる。果たして自分は、いまのいま、まさしくまざまざと自分が蝶である夢を見た「人間」なのか、それとも、人間の夢を見ている「蝶」――いまのこの自分は、蝶が見ている夢なのか……（少し笑う）おかしいでしょう。むろん、いまの私は――〈いま〉っていう時間なんて、相当あやふやだけど――とにかく、ここに、こうしている。蝶じゃありません、甲虫でも……ないつもりです。（自分をつねるなど）痛い、しかし、証拠にはならない、夢のなかだって結構痛いし、気持ちもいいし……現実感がある、と言うべきかな。（漠然と客席の方向に）あなた、痛くない

ですか、夢のなかでは？……ない？……お忘れになってるだけです、きっと……おや？

蓬髪の乞食のような老婆と、汚い浮浪児。

案内役　（ぎくりとする）なんだ、あれは？……ひしゃげた煙草の吸殻をばらして、集めて、何本かから、新しい一本の煙草を作る……そして売る……すると、どこなんだ、ここは？……今日の、いや、今夜の夢は？……といっても、同じことですが。どっちでも。

ガードを通る電車の音が聞こえる。音楽が、まずリズム隊から。

案内役　どうやら、来たようです、いつもの街へ。私のダウン・タウン。

湧きだしたように、大勢の人々が現れ、ゆっくりと、けだるそうに足を運んでいる。サラリーマン・傷痍軍人・担ぎ屋・ヤクザ・娼婦・学生・ＯＬ等々、時代を超えて。どこへ行くというのではない、ただ歩き廻っている……迷路のような道を。

コーラスと人々　（以下、大意）夢の中できっと出会う街がある／人間の欲望がつくった街さ／夜の重い闇から　朝焼けの露まで／夢の通り道　迷い道（人々「ドリーム・ロード」）／人はみな迷子さ道にはぐれた子供（「ストレイ・シープ」）／さあ踏み込んでおいでよ（「カモンナ・ヒア」）／その橋をわたって……

案内役　あのあたりが駅だ、と想像してみてください。この上は何号とか何十、何百号とか、とにかく名のついた幹線道路。そこから橋をわたる、階段をおりる、なんでもいい。そのたとえば崖下に、バラック同然の飲み屋が押し合い寄り添い互いに凭（もた）れ掛かる

ようにして犇（ひしめ）いて、いったん踏み込むと、まるで迷路。その一軒の裏口の戸を開けるといきなり隣の店の真ん中に出たり、トイレに行って帰りを間違えて、そのまま戻ってこない――なに、向か

いの店あたりで知り合いに出会って話しこんでるだけでしょうが
――覚えがおありじゃないですか、そんな街を。
コーラスと人々　（大意）夢がたどる今はまぼろしの街／風の思い出にうなされて東京／炎に追われて　総天然色（テクニカラー・シネマスコープ）／当てどなく逃げる　立体音響（ステレオ・サウンド）／夢の通い道　はぐれ道／生きるか死ぬか（トゥビー・オア・ノット・トゥビー）なんて神様のジョークさ／ヘイ　カムカム
ウェルカム／ここは東京カスバ　夢の迷路の街（ラビリンス・タウン）……
案内役　（むろん、コーラスたちの歌・動きと重なって、回想に誘われ）
……空には星が綺麗で、地上はさっぱりと焼け跡。そんなありふれた町の、たいがい電車の駅の周辺に、一夜にして青天井の闇市が現れ、ひろがり、それから曲がりなりにも焼けトタンの屋根やベニヤ・葦簾・筵などの仕切りが出来て、カスバのような迷路を持つ飲食店街が出現する……そんな時代を私も多少知っています。ちいさな中学生の私は、片っぽの肩にだらしなく鞄の吊り紐をひっかけるようにして、ただ怪しげな食べ物どもの醸す唾のわくような匂いに惹かれて、うろうろと歩きまわったものです……そこにはなんでもあった、手に入れることができた、金さえあれば。……ついこないだまで、つまり戦争中は、一億の日本人皆が飢えているのだと思い込んでいました。豆粕を食べ、雑草も食べました。しかし、いまや事態は変わった。金のあるものは食え、ないものは食えない。はっきりしています。そして私たちは圧倒的大多数の、無いほうに属していました……もう、それからどの位時間がたつのか……おや、こんな店が、こんなとこに……
ここまでに人々の歌は遠くなり、いつの間に、小さな飲み屋が舞台前に押し出されて、灯の入った看板に弓に矢をつがえた稚拙な

絵、屋号は「小ゆみ」とある。
案内役、惹かれるものを感じて、時計を見る。首を捻る。鞄から携帯電話を出して、アンテナを伸ばし時報をきこうとする。が、雑音ばかり。周囲の音は、一九五〇代前半の曲。
「どうしたんだ、いったい……」眩きながら、魅いられたように近づきドアを押す——見えない扉で、音響で表現する。

2

店の中には、学生ふうの若い男がとまり木に一人、カウンターに顔を伏せて眠っているようにみえる。

案内役　ごめんなさい……（若い男が身動きした）あ、失礼、勘弁してください……お客さん——ですよね、あなたも。で、お店の人、だれか……

若い男　ええ。ですけど……

案内役　え？ なんです？

若い男　客ですけど、

案内役　ああ。やっぱり（へへへと笑う）

若い男　じゃないようなもんです。借りがだいぶ——いや、嫌だな、すぐ嘘をつく、恰好つけて、こんなこっても。まるで、払ってないようなもんで、実は。

案内役　はあ……いや、私も、

若い男　お客さんですよお、おばさ—ん。

案内役　あ、いや、ですから私も、いいんです、なぜだかわからないんだ、自分がどうして——気がついたときには、このドア押し
てて。

はなやかな笑い声がして、この店の主らしい女、奥の戸口から「お待たせえ」と登場。案内役、びっくり。

案内役　お咲さん！……

咲　はい。（怪訝な顔で）咲ですけど……うーんっと、ごめんなさい、ここまで出て来てるんだけど、お名前、ええっと、うーん……

案内役　（不安だが、微笑んで）泰治。

若い男　（またカウンターに伏せていた顔をあげる）はい。

案内役　え、きみ、ごめんなさい、あなた……。

若い男　（以下、泰治）泰治です、甲野泰治。ご存じなんですか、ぼくのことも。

案内役　（つまる）え、あ、あの……あ、水割りください。

咲　はい？

案内役　（困って、泰治の前のコップを指し）同じものを——

咲　ハイボールですね。（洋酒の瓶を）これで？　こっち？

案内役　あ、そっち。（汗を拭く。まだ事態がよくつかめていない）

咲　（自分の前のコップをあけた泰治に）同じでいいの、泰ちゃん？

案内役　（思わず）はい。

泰治　（同時に）はあい。

三人、顔を見合わせる。

案内役　ごめんなさい、子供のころ、そんな名で呼ばれたことがあったもので……

咲　あの、失礼ですけど、お名前……

案内役　原田です。原田善彦。

咲　じゃ——もしかして、泰ちゃんのお父さんの——原田善治郎っていうんですけど—

案内役　はい……善彦の善も、同じゼンの字で……

泰治　じゃ、親戚——

咲　近い？（案内役、うなづく）似てるわっ。

泰治　え、誰に。
咲　旦那さんに、あんたのお父さんに。――そんな気がするけど。
泰治　おれね、親父の写真見ても、似てるって実感ないんですよ。
　自分に。
案内役　それは、ぼくも同じです。正直、原田善治郎さんのこと
　を、良く知らない……親戚だけど、近い。
泰治　同じです、なんせ、小学校一年の時ですから、ぼくの。親父
　死んだの。
咲　そうかあ、弓屋へ見えたことあったんですね、それで、私の名
　前も。（ハイボールを）はい、どうぞ。で、ご商売は。株屋さんて
　ことないわよね。ははは。
案内役　教師です。
咲　先生。
　　背中の大きく丸い男、中之郷（咲の夫）、浮かない顔で。
咲　いらっ――なんだ、お帰んなさい。
泰治　お邪魔してます。
案内役　（半端に立って、頭を下げる）しばらく……
中之郷　（習慣的に頭を下げて）すみません、看板にさしてもらいま
　す、今夜……ちよっと、物騒なんで。
咲　いやだ、また――（手早く片付け始めながら、案内役に）この辺
　ね、アジア親善市場振興会って第三国人が仕切ってるんですけど
　ね、そこへ戦前からの組の連中が戻って来て、
中之郷　おい。（余計なことを）
咲　いいのよ、ご親戚なんだから、弓屋の。ね？（お勘定はいい、と
　　いう意味も）
泰治　おじさん、おれ、寝るとこないんだ、今夜。
咲　また。寮に帰れないの？　物騒で？――困った坊やだこと。

（案内役に）あ、またどうぞ。

例の音響とともに、案内役は店の外へ。夫婦の「しょうがねえだろう。男には男の、何だ、事情があらあ」「どうだか、泰ちゃんの事情じゃ、知れてるわよ……」などの声が聞こえながら「酒処・小ゆみ屋」は、案内役から遠ざかって行き、舞台の模様は変わる。音響も。

案内役　どうも……何が起きたんだかが、私にもよく――いや、私が一番、わかっていないのか……過去に、遠眼鏡を向けるようなことを――と言ったのは作家の誰だったか、教師の癖に、すみません――そんなことをしてるうちに、たまたま逆さまになっちまって、ええ、望遠鏡が。で、それを覗きこんだら、ずっと遠くの豆粒みた様な世界に入っちまった、自分が。つまり、「過去」に。（頭を掻きむしって）短編の主題だ、誰かの。――で、私は、私よりずっと年上の癖にあんなに若いお咲さん夫婦や、それから、どうやら――自分自身に会ってしまったらしいのです、過去の。甲野泰治。私の少年時代までの名です。

ブギウギのリズムが聞こえてくる。

案内役　覚えています、あのリズムを初めて聞いたとき――ああ、違う世界に投げ込まれるんだな、これから、おれたち……と……ああ、これではちょっと、お話しても聞こえないでしょう……

（盛り上がる音楽と入れ替わるように退場）

3

安キャバレー、といっても、ここが当時の三流というわけではない、むしろ、バンドや歌手には一流どころを揃えているつもり。コーラス隊は、ここでは歌手兼ダンサーで客の相手もする。スリムで美しい「歌姫」を中心にこの音楽シーンは展開させたい。

古風なミラーボールが回っている。古物のソファに、いま和服の初老の男（八代目組長）が、子分たちらしい海陸の飛行服や復員姿の若者に囲まれて席についた。子分の一人が、まだ中学生かと見える少年（安西）を組長に引き合わせているが、声はよく聞こえない。「親分、こいつ、お話しました例の――おう、親父さんにしっかりお願いしねえかっ」「はいっ、安西進であります、よろしくお願いいたします」「若いなぁ」「ふふ、自分はこの歳にゃもうゼロ戦に乗ってたですよ……」などなど、笑い声。

歌の切々のいいところで拍手。組長たちも。ちょうどそのとき、やはり復員服に戦闘帽、腹巻だけはしっかり締めてる男、須藤が、無理やり引きずるようにして、島本（泰治の姉、友子の夫）を連れてくる。島本は労働に日焼けして、逞しいが、元やくざの面影はない。片手だけに手袋。

須藤　いいって、いいって、待ってなさるんだから、お前を、親分がさ、八代目がっ……

島本　でも、俺はとても、だって俺は、かりにも、親分の甥御を

――

歌姫が拍手に答えて、また礼をしたので、また盛り上がる拍手。ホールの照明もさっと明るくなるので、立ちすくみ、戸惑う島本。

組員たちも立ち上がり、彼らを迎える。

須藤　組長、島本の兄弟を連れて参りやした。

八代目　（うなずいて）暫くだったな、島本。ご苦労だった。

子分たち　（一斉に）ご苦労さんでした。

島本　い、いや、俺はなにも……あんたがた、みんな戦争行って、ご苦労なさってる間、俺は銃後で……その、手が不自由だもんで、鉄砲握れねえから……

須藤　兄弟はな、（仕種で）詰めてなさるんだ。二本。（驚きのさざ波、女たちにも）

島本　申し訳ねえ。勘弁しておくんなさい、親分も、須藤さんも、皆も……

女たち　（の中から）見たいわ。ねえ。

須藤　おう、お前たち、何か勘違いしてやしねえか。親からもらった指、好きで詰める野郎ぁ誰もあらしねえんだっ。——見てぇか。（じろり、見回して若い子分に）

安西　見、見たいっす、おれ……

須藤　兄弟、たのむ。

島本　冗、冗談だろう、須藤さん……組は昭和十六年に解散して、俺ァもうずっと素っ堅気だ。……戦時中は微用で軍需工場に勤めてたが、いまは運送屋さ。リヤカー引いて人様の荷物あっちからこっちへと運ぶだけの仕事だが——

八代目　繁盛してるようだな。聞いてるよ。

島本　へい、俺、体だけは丈夫だから……

バンドと歌手たちが、次の歌にかかった。

島本　んじゃ、私は……仕事が残ってるもんで……

須藤　兄弟、おれの頼みがきけねえってか。（頭を下げて）こうしてもか。

島本　須藤さん、無理言いっこなしにしようぜ。（親分に丁重に礼をして行きかける）

須藤　待ちゃあがれ。

びっくり、バンドと歌手たち、やめる。そっと何処やらに知らせに走るのがいる（ボーイ）。

八代目　須藤。（たしなめて、歌手たちに）続けてくんな。（財布から金を）

須藤　（親分に頷き、やさしげに島本に近づく。歌手たちに）やんな。

おそるおそるのように音楽と歌が始まる。

須藤　誰が手前の小汚え指なんか見てえかよ。……組の解散は、非常時のせいよ、戦争よ。もう終わったんだ。……荒廃した祖国の復興のために一肌脱ごうてんで、親分もようやっと腰を上げなすったんだ。……お前のこの手袋の下にあるのは、ただの左手じゃねえ。戦争中に俺たちが無くしちまつた〈しきたり〉だ、掟だ。精神よ。いわば俺たちの晴れがましい門出に、朝日にかがやく連隊旗よ。あははっ……

島本　（須藤に握られた左手を外す）失礼します。

出て行こうとしたが、行けなかった。大柄な振興会の男Aと、機関銃を構えた男Bが登場。女たち、悲鳴。

振興会の男A　（強い訛り）静かに。……ここはエイシャン・フレンドリー・マーケット、アジア親善市場振興会のシマ、テリトリーです……みなさんで、平和に、静かに遊んでください……大きな声、ノー、喧嘩、ため……エヴリバディ、フレンド、OK？

八代目　王さんだね。洗濯屋の。

振興会の男A（王）　ああ……八代目さん。

八代目　お上手だね、英語。……これからはイングリッシだってんで、へへ、私もこの年で、ラジオにしがみついて、カムカム、エブリボーってやってみたが、へっへ、てんで駄目。いつも思うこったが、お国の人は、皆さん器用だ、ほんと……

振興会A　日本人にはとてもかないません。

須藤　なにっ？

振興会A　ストップ。大きな声、ノー。さ、みなさん、ショーを続けて。どうぞ。プリーズ。

歌姫　……あ、はい……（バンドに）OK？

歌姫とコーラス、身を寄せ合って歌い出す。

須藤　やめろ、聞きたくねえ。

歌姫とコーラス　（すうっと声がフェイド・アウトしかける）

振興会Ａ　（面白そうに）つづけなさい、あなたがたのボスの命令です。

振興会Ｂ　（機関銃を構える）

歌姫たち　（歌、大きくなる）

須藤　客が聞きたくねえといってるんだっ。

振興会Ａ　命令です、つづけなさい。（須藤に）あなた、出なさい。

ゲラウト。

須藤、動かない。気がつくと笑っている。八代目も。子分たちも。

振興会Ａ　なにがおかしいですか。（歌手たちに）つづけて。

須藤　振興会さんよ、あんたがたは戦勝国民だ、解放国民だてえ進駐軍のお言葉、あら取り消しだってな。

八代目　連合軍の将兵と、それに協力する民間人の他は、日本の法律に従え、これが新しいお達しさ。マッカーサーは気が変わったんだ。もうあんたたちを守っちゃくれねえのさ。（笑う、子分たちも）

振興会Ａ　誤解していますね、親分……その法律を、日本の……作るのは誰です？……（見回す）

組員甲　そ、そらあ、日本人が、

振興会Ａ　スガモ・プリズンに入っている人たちが？　あっはっは……（歌手に）続けなさい……（組員たちに）法律はＧＨＱが作る、連合軍総司令部が。目的は、自由と、平等。八代目さん、あんたに特別の恨みはない。しかし、それなりの覚悟はしてください。私たちから、いっさいの自由と平等を奪っていたあなたがた

日本人が、これから同じ条件の下に立つのです、私たちと！――
自由に、平等に！

須藤　いいだろう、ハンデなしで行こうじゃねえか。

組員の一人が上着をあけるとダイナマイトが帯状に並んでる。

振興会Ａ　カミカゼですか。特攻か。オーライ。（歌手たちを見て）
つづけなさい、何もなかったように、平和に……何があっても。

歌姫はじめコーラス、一所懸命頷き、歌いはじめる。

以下、彼女たちが歌い続ける中に、次のようなシーンが展開する。

場所を替えよう、というように顎をしゃくって、振興会Ａが指図。そのとき振興会Ｂが促すように横に振った機銃に、島本の頭がはじかれる。「このっ」と文字通り頭へ来た島本が反撃、機銃を奪いとり、放る。振興会Ａが天井に向けて一発撃った。暗くなる。――しかし、音楽は止まらず、歌は止まない。そのバックに乱闘、やがてスローモーションで、あるいはシルエットで。やがてＯＦＦで機関銃の連射音、銃声、更にサイレン、ＭＰのジープが来て英語のアナウンス等。

その中をモク拾いの老婆がちょこちょこと走り回って吸殻を集めるなどあるか。

やがて、それらの影も音響も遠のく。

歌姫はじめコーラス一同、なお笑顔で、夢中で歌いつづけている。

老婆　（来て）もう、いいんでないの。

歌姫とコーラス、歌を止めた。バンドも止む。へなへなと倒れる。

4

島本の家。下手の土間にリヤカーや、自転車やオート三輪のタイヤなど。事務机の上に電話。上手に一間きりの畳の部屋。
友子がバケツの水に自転車のタイヤのチューブを突っ込み、パンク箇所を調べて軽石でこすり―つまりタイヤ修理中だが、なかなか手際がいい。歌を口ずさんでいる。
小学校が近いか、子供たちの声や、少し調子の狂ったオルガンの音なども。午後の陽も大分傾いた頃。
電話が鳴る。

友子　（出て）はい、島本運送店でございます。運送は迅速、丁寧、
確実をモットーとしております――泰ちゃん？――なんだ――え？　近くへ来てるから？　いいわよ、べつに……じゃ。（切って仕事に戻る。鼻唄）
以後ずっと先生とよばれることになる男、山内がきょろきょろと来る。いたって風采は上がらない。
「島本運送店」の看板を見て、ほっとして……友子のパンク直しの手際を見る。友子がゴム糊の類をとろうとするのを、とってやる。

友子　あ、サンキュ……（気づいて）すみません……近所の子供かと、よく見に来てる子、いるもんだから……

先生　お上手なんですね。（訛りがある、西の）

友子　いいえ、母がね、自転車屋やってたんです、若いころ……母は上手でしたけど、私は見様見まねで……
また電話。

友子　はいっ、島本運送店でございます。ああ、毎度どうもありがとうございます。はいっ。明日？（メモしながら）三時に御徒町のお店、はい、どうもありがとうございます、へーい……
顔を見合わせて、なんとなく笑う。

先生　東京なんだなあ。
友子　はい？
先生　いや……私ぁ、九州から出て来よったばかりですけん、女房子供ば連れて……国じゃ、あなたのような元気な女子はおらんとですよ、はは……
友子　下町だからですよ、このへん。はねっかえりで、おしゃべりで、私みたいな……
先生　ああ、下町……
友子　あの、……で、何か？　パンクですか、自転車の。いいですよ、自転車屋じゃないけど。
先生　ピアノなんです。
友子　ピアノ？
先生　はい、生徒の親戚で、大森の方の、焼けとらんお宅に……ほら、聞こゆっとでしょう、オルガン、音程の狂った……生徒たちん耳の悪ンなるばっかりですたい……文化国家だちゅうに、こるからぁ、日本は。
友子　わかりました。ピアノ運ぶんですね、大森から、先生の学校まで。裏の。
先生　はい。——あ、私を小学校の教員と、どげんして。あ、そうか……はは……
友子　（笑って）で、いつ？……いつお運びすれば？
先生　あの……ここは、運送店ですね。
友子　はい。
先生　リヤカーですか。（友子うなずく）リヤカーでは、ちょっと……
友子　オート三輪もありますけど、いまは、主人が……
先生　あの、バタバタっちゅう……（友子「はい」）駄目だな、きっ

と……

友子　何故ですか。

先生　難しいんです、ピアノは。ほんらい、専門の業者でなかなら……

友子　（ノートをばたんと閉じて）無理ですわね、いまどき……

先生　……失礼しました……（すごすごと立ち去ろうとする）

友子　（急に）待って下さい。……なんとかします……やらせて下さ

い……私、責任持ちます……朝暗いうちにこっちを出て……ピアノに、布団を巻いて、赤ちゃんみたいに、揺れないように、そっと運びます、道を選んで……リヤカーのほうが却っていいわ……夜までには着けるでしょう……

調子外れなオルガンがまだ聞こえている。

友子　あこがれだったんです、ピアノ……一度、触ってみたかった……お願いです、断らないでください……

バタバタと無神経な音がして、止まると「さあ着いた、さあ来ねえ、俺様の御殿へよっ、なんたってバラックだけどよっ」などの声がして上機嫌の島本が須藤と子分（組員）甲・乙、それに安西らを連れて登場。一同日のあるうちから酒が入ってる。

島本　おうい、帰ったぜっ。（須藤に、友子を）女房、これ。へへ。

須藤　や、どうも、これあ姐さん、この時世だ、仁義万端取りまとめて略させて頂きやす。島本の兄貴とは戦前からの、

島本　その兄貴は止めてくれよ、須藤さん。さ、上がって上がって。おう、皆も入んな。（友子に）酒あるだろ、酒。こないだ箱崎の軍人さんが運送代払えねえからって持って来たの、あるだろ。出せ出せ。（須藤に）俺がふだん飲まねえし、物々交換でウテナ・

クリームとでも替えようかって思ってたんだ、ちょうどよかった

い。え、日の丸と軍艦旗がこうぶっ違いになってる奴だ。もと中

将なんて人が隠匿してた酒だ、なんつっちゃ悪いか、あっははは……

この間、友子は止むなく、それでもニッコリなどして裏の台所へ行った心。先生は何となく事務机の傍に残ったが、須藤たちは事務員とでも思ったか、気にとめない。

須藤　いい女じゃねえか。芸者か。

島本　なにをっ、どうして。

須藤　美人だからよ、だって。（戻って来た友子に）どうもどうも、なんせ島本の兄貴は持てたからねえ。一度くっついたら鳥黐（とりもち）みてえに女の方から離れねえ。（島本「止めてくれよ、その話は」など）赤トンボとか銀やんまとか向こうからツーイ、ツーイって寄ってたかって来っから、さあ竿が何本あったって足りゃしねえ。（島本もついガハハと笑ったり）とうとう先代の組長、七代目の息子の何に惚れられちまった。（若い連中も身を乗り出して聞くので、先生は座っていた椅子を譲ったり）ま、鬼やんまみてえな女だったけど塩辛よりゃいいやな。その色事がついにばれた。男は日本刀を持ち出して島本の兄貴を追うっ。どこだ島本おっ、島本どこだーっ。

タンゴが聞こえている。先生まで乗り出して聞く。

須藤　そのとき兄貴すこしも慌てず、朝日屋という飯屋で昼食をしたためていたが、ずいと台所へ入って一本の出刃包丁を掴む。おう、おれは逃げも隠れもしねえぜっ。居たなっ、死ね島本っ。大だんびら振りかざして斬ってかかる。兄貴右に左にと燕のように躱（か）わすと、相手の心の臓めがけてぶすりっ……ただ一突き。うーむと即死。

一同嘆声。島本「そんな、ばかな、あはは」

須藤　なんせ日本刀と出刃だからね。警察も正当防衛を認めた。だからよ、こないだの戦争だって、正当防衛よ、日本は。あはは

はっ……

島本　いい加減にしろよ、本気にすっじゃねえかよ、みんな？

須藤　兄貴、謙遜が過ぎると厭味だよ、え？

島本　（皆に）嘘だからな、嘘。法螺、大法螺。

須藤　（凄んで）おう、兄貴だ兄貴だと立てりゃ、え？――いつ俺が

嘘をついた、え、いつ駄法螺を吹いた？

島本　だって、現にうちの女房、見てたんだから、な、嘘だよなっ。

みな、友子を注目。

須藤　ほんとですか、姐さん……現場に。

組員甲　（通称、予科練）――で？

友子　（微笑んで）ほんとです、肝心のところは……

須藤　ほれ、見ねえっ……

島本　しょうがねえな――ったく。ま、飲みねえ、飲みねえ。あ、俺はいいの、だって飲けねえ口なんだから……いや、実は、その時が縁で……（など、以下次第に盛り上がる。子分の一人が先生にも酒をついだり）

友子　（外の人影に気づいて）泰ちゃん。

泰治が、少女っぽい女子学生と立っている。

泰治　お姉ちゃん……賑やかだね。

友子　どうしたの……（気配を察して、弟に耳を貸す）お金？……（女子学生を見る）

外に、コーラス隊。そろそろ歌。

須藤　（若いのに）な？　いいダチ持ってっだろ？　俺についてりゃ大丈夫ってこと、金の脇差よ。（島本が早くも酔っているのに）おう、兄貴よ。そろそろ、こいつらによ……（仕種で、手袋を外せ、と）

島本　（拒むが、乗せられてついに左の手袋を外す）
組員たち　……（感嘆する）
島本　おれ、不器用だから……はは……
須藤　寄って拝ましてもらいねえ。さ。
組員たち　へい……
また嘆声が盛り上がりかけると、友子が「あんた」と声をかける。
島本　え、何だ？……おう、泰ちゃんか……（須藤に「女房の弟なんだ」など）
泰治　（子分たちの中に旧友を認めて）安西……
安西　甲野っ……（立ち上がって近づきかけ）俺に、用？……もしかして、お前、おふくろに頼まれて、俺さがして……
泰治　（首を振る）姉の家なんだ。
安西　なんだ、そうか……（ほっとして、仲間に）こいつ、隣の机だったんす、中学で……
須藤　（からみ酒だ）安西っ。姉さんの弟御に「こいつ」た何だ。
（島本「いいじゃねえか」須藤「よくねえっ、しきたりだ、掟だっ」「しょうがねえな」などあって、組員たちに）お前ら、島本の兄貴の姉さんの弟さんに、挨拶しねえか、大学教授のお宅に世話になってらっしゃるんだ、秀才だから。お前らた出来が違うんだっ。
組員たち　へーい。（頭を下げる）
泰治　（頭を下げる。女子学生も）
島本　（もうべろべろ）で、何だ、泰ちゃん、泰坊……金か、また？……この泰坊っちゃま、はは、結婚するとき、びーびー泣きゃあがって、ははは。（友子「あんた」）
組員乙　（通称センバン、旋盤工。びっくり、泰治に）もう、結婚されてるんで？

島本　おれたちの、よ、婚礼んとき、白く塗ったくるでしよ、花嫁。そしたらこいつ（泰治）、お姉ちゃんが変わっちゃった、お姉ちゃんじゃないって……しょうがねえ、こいつ（友子）、鏡向かってこう、まみえ（眉）なんか落としちゃってよ、ははは……

先生が腰を浮かした。「あのう……」

島本　泰ちゃん、おかみさん、いや、おっかさん元気か？……

泰治　……相変わらずさ。

島本　そうか、相変わらずなら、ま、いいや、いいとしなきや、な？この節。

先生　（やや大きく）あのう……

皆、やっと気づいた。

島本　誰、どなた？

友子　お客さまよ。（島本「お客さ――」）先生よ、裏の学校の。

島本　こりゃ、どうもどうも……おい、先生ったら偉えんだぞ、手前らっ。

組員たち　へい……

須藤　手前ら、兄貴のいうこと聞けっ。

組員たち　へい、兄貴……（と島本に）

島本　おう……その、なんだ……挨拶しろ、挨拶っ……先生にっ。

組員たち　へーい……

組員たち、折り目正しく頭を下げる。

先生も頭を下げる。

コーラスが歌いだす。それは例えばピアノ協奏曲の、オーケストラ部分をスキャットにしたようなものか。

コーラスを残して暗くなる。

5

同じ島本運送店だが、多少の時日が経ったことを示すために、人物の服装や、タイヤも太いのが増えるなど、変化がある。
島本は特に、派手な進駐軍放出物資の背広など着ている。居間に彼と友子、なにやら険悪な雰囲気。夜。
土間（事務室）に組員乙、喧嘩支度で拳銃や日本刀の手入れなど。

友子　あんた……
島本　わかってるって。言うない。（大きく構えていたが、すこし小さくなる）
友子　質問も駄目？
島本　いい。（もっと小さくなる）
友子　（土間を指して）あれは何。
島本　いいじゃないか、貸すくらい……土間くらい。友達に。
友子　（島本の背広を）これはなに。
島本　服。（慌てて）いいじゃないか……
友子　サーカスに入るんですか。運送屋やめて。
島本　はいら――やめないって。お、俺ぁ丈夫なだけが取り柄だから、だから、体一つが元手のこの仕事を、おれは、断固として。
友子　そ言われたからじゃない、おかあさんに。
島本　そうさ。尊敬してるもん、おれ、お前のおっかさんを。もち（ろん）、お前のことも、だけど。あはは。
友子　べつに、尊敬してくれなくていいから……
島本　じゃ、惚れてる。
組員乙、思わずぷふっと笑う。すぐ真面目に仕事に戻る。刀を灯にかざして見るなどすると、ぎらりと光る。
友子　（じろりと見て）ご縁があるのね。
島本　あのな、お前、焼けて半分火の通ったリヤカー一台から始め

て、オート三輪、それからトラックと、ここまで来たんだぜ、島本運送店はよ、嬉しいじゃねえか。素直に喜べよ。ま、ついちゃ安い出物があったからって世話してくれたのは須藤君だし、その須藤君からちょっと貸せっていわれりゃ断れねえよ、な？

友子　あんた、君（くん）っていうようになってるのね、あの人のこと。

島本　須藤君を？――あそうか、そりゃま、立ててくれっから、おれを、あいつ、須藤君。――いつのまにか、だろうな、はは。

安西が組員甲と重そうなものを運んでくる。乙も手伝う。

島本　や、ご苦労さん。

組員たち、折り目正しく礼。荷解きにかかると、電話が鳴る。

組員甲（出ようとする島本を制して）はい、島本運送……あ、自分です。荷はいまここへ……これから組み立てを……は、予定通り、決行でありますね、０１３０（マルヒトサンマル）……了解。（島本を見て、ニヤリ。島本も「おう」などと受ける）

友子　……なに、あれ！

重そうな荷の中から出て来たのは、旧日本軍の機関銃。

島本もその重量感に驚嘆するが、事態を予想していたようだ。

友子　あんた……知ってるのね？……何が起きるの、これからっ……

組員甲　島本の兄貴……姐さんにゃまだ……そりゃいかんですよ……よければ、自分から……（島本うなずいている）

友子　須藤さんは？

組員甲　須藤の兄貴は、組長と……実行部隊の責任は自分でありますから……

友子　ききたくありません。

組員甲　そりゃいかん、姐さんともあろうおかたが――

友子　私は姐さんなんかじゃないっ、ありませんっ。

組員甲　この機銃をトラックにのせて、ぶちこむんであります、アジア親善市場振興会の事務所に。走りながら。
友子　うちのトラックで？
組員甲　しかし、半分は—だから、お話してるんで。
友子　なぜ？ なぜ、そんなことっ——
鳥本　友子……
組員甲　さあ。日本人だから、でありましょうな。
他の組員たち　（うなずく、島本も）
友子　だって、だって、人間でしょ？——
組員甲　人間です、敗戦国民でも、四等国民でも、精神年齢十二歳でもっ。
友子　人間でしょう、相手だって、第三国人だって。何々国民である前に、同じ人間でしょう？ なんで区別するの？
島本　友子。
電話が鳴る。安西出る。
安西　はい、島本運……はい、安西ですが……は、はい、いま……（甲に）
組員甲　（とって）はい……え……（低く）ズかれたんじゃないかって、そんな……え？……はい……はい……
島本　あの、あのな……思うんだけどさ、人間てもんは、一人じゃ生きちゃいかれねえ、寂しい動物でよ……
友子　そうよ、わかつてる、そんなこと。だから、
島本　聞けよ、聞いてくれ、だから……夫婦ってもんもあるし……隣組——はねえけどよ、国があるんだ、日本って国がよっ……
友子　（首を振っていた）万国の労働者が、団結すればいいのよっ。
皆、呆気にとられる。低く話し続けていた組員甲が、電話を切る。

島本　お前……すごいことというなあ……デ、デモ行進みてえな。赤の。

友子　読んだのよ、本で。……ヨーロッパを一つの怪物が歩き回ってる、ってのも知ってる。……借りたのよ。

安西　赤の本ですね。

島本　（舌打ち）泰坊か。八つも下の弟に。

友子、首を振る。既出のピアノ曲が不意に聞こえる。

島本　ま、ヨーロッパのこたいいやな、このさい。……電話、何だい？　予科練。

組員甲　ついいましがた、振興会の事務所に灯が煌々とついたそうで。

島本　こんな、夜中に。

安西　情報が洩れたんですね？

組員甲　誰か、売った奴がいるんだ……

電話。すぐ甲が出る。「はい……なに？……」すぐ切れたようだ。

組員甲　武器を持った連中が向かっとるそうです、ここへ。

島本　な、なにっ、なんだとっ？

甲のほかは、いや、実は甲も含めてパニックに陥りかけたところへ、組員丙が転がるように飛び込んで来る。

組員丙　振、振興会の連中が、トラック二台、オート三輪一台……

トラックなどの音響、そしてヘッドライト。島本が電気を消す。

窓を照らすヘッドライト。皆、首をすくめる。月光。

振興会たちの声高に交わす中国語系の言語のなかに、王の声が大きく「待て……止まれ……命令するまで動くな！……」

こっちでは囁き合う「わかるか？」「わからねえ」など。

組員乙　どう、どうしよう、兄貴っ。

組員甲　どうったってしようがねえ、弾の続く限り撃ちまくって、

あとはグッバィよ、とっくに死んでるとこ生き延びて来たんだ、どうってこたねえよっ……（手伝わせて窓に機銃を据えた）

友子　（悲鳴のように）やめなさいっ、まだ殺し合う気？

組員甲　姐さん、おれたちにとっちゃ戦争はまだ終わってねえんだっ。

コーラスが、全然関係なく――突然進駐軍向け放送が聞こえて来たかのように――歌いはじめる。

歌の間に、差し込む月光の位置が変わって、時間の経過を示す。

電話。とびつくように甲がとって、

組員甲　はいっ……なに？……誰だ、手前……王さんか、洗濯屋の……何だと？……

組員乙　兄貴っ、誰か……誰か来る！……

組員甲　どんな奴だ？

組員乙　よくわからねえ、ヘッドライトを背負ってるから……なんだか、揺れてる、影が……

安西　武器を持ってるからだっ……

組員甲　（電話に）なにもんだ、そいつ……おれたちに用じゃねえ？

……じゃ誰に？

組員乙　来る、来る……撃ちますか、兄貴っ……

組員甲　（電話が意外な言葉を告げたらしい、友子を見る）友子さん――っていうんですね、姐さん？

島本　そ、そう、それがどうした？

組員　甲野初さんの娘の

島本　ああ、うちの女房に何の――

安西　あ、何か言ってる……

鈴の音。そして歌声、男の。

友子　あの声……聞いたことがあるわ……

コーラスが、男の歌ったフレーズを繰り返す。

友子　あの人が、わけのわからない言葉で言ったら、おかあさんが同じ言葉で答えた……

コーラス、前作「母の写真」で友子の母初がうたったメロディを。途中から（或いは二度目から）友子も歌う。近づく光と影。

組員乙　武器じゃねえ、杖だ……足の悪いでかい男だ……

組員丙　撃ちますか、兄貴っ。

組員甲（首を振って、電話に）わかった……こっちゃ、そっちの出様次第だ……（切る。組員たちに、入り口に向かって武器を構えるよう指図）

コーラスと鈴の音が高まり、揺れるヘッドライト……護衛のために漸次接近している……の中に、杖をついた男が姿を見せる。

林田　（外国人の訛り）ごめんください。甲野友子さんのお宅ですね。

友子　（身動きする島本を抑えて進み出る）友子です、初の娘の……いつかの方ですね、私はお声と後ろ姿しか……

林田　林田と申しておりましたが、林（りん）です。林勝利（リンスンリー）。原善さん……原田善治郎さんにも、初さんにも、大変お世話に……お咲さん、武田さんたちにも……弓屋の皆さんのお蔭で、私、こうして、生きています……

友子が、ヘッドライトを眩しげ。林田、後ろを振り返って手をあげ、中国語で「さがっていろ、私は大丈夫だ」という意味を大声で言ったようだ。王の声で答えがあり、林田が手振りを含めて重ねて後退を指示、やむなく承知した様子で王の指示の声も聞こえ、やがて音響とともに、ややヘッドライトが遠ざかる。

林田が微笑みながら振り向いて一足踏み込んだ途端に、甲が銃を横腹に押し当てる。

組具甲　あんた、大分えらいさんらしいが、まず、こちらの質問に答えて貰おうか。……どうしてわかった、今夜の俺たちの作戦計画が？……誰が売った、おれたちをっ……

林田　（動じない）そうですね……ご承知になったほうがいいでしょう……

林田、手をあげて事務机のほうを指す。そこにいた組員乙に皆の視線――次いで甲・丙の銃口が向けられ、組員乙、腰が抜ける。

組員乙　（口を金魚のように）ち……ちがうっ……

林田　あなたではない。（杖で指す）それです。

組員甲　電話？……

林田　今夜、予定通り、決行する、マルヒトサンマル……

安西　盗聴されてたんだ！……

島本　この電話が、振興会に繋がっているってのか？

林田　（首を振る）どんな電話でも、盗聴できる人たちと、その組織があるのですよ、いま、この国には……秘密に、しかも堂々と……

島本　進駐軍……（一同、驚愕）

月が翳る。コーラスが、また。BGレベルで。

林田　このお家には、あなたがた組関係の出入りが多いので、彼ら――G2、参謀第二部に属するCCD、Civil Censorship Detouchmentのウォッチ・リストに入っていたのでしょう……内容がただちに振興会本部事務所に伝えられ、皆、殺気立って武器を手に押し出して来た、というわけです……

組員甲　くそっ、やっぱり進駐軍は手前らとっ――

林田　（首を振る）それは違います。彼らが望んでいるのはおそらく、共倒れでしょう……私たちと、あなたたちが、戦って、殺し合って、地域の人民……町の人々から、恐れられ、嫌われ、追放

される……自分たちの手は汚さずに……

組員甲　く、くそっ……（やけくそに銃を天井に向けた）

島本　（飛びついて止める）止めろっ、は、蜂の巣にされちまうぞ、やつらに、銃声がきこえたら……（もみ合う）

友子　（不意に、林田に）あなたは……それを、させたくない、と思ってらっしゃるのね？　私たちと、あなたがたが、戦うことを……

林田　はい……私、日本軍の侵略反対の組織で行動していましたから、進駐軍にパイプがありました。どうしても止めたい、と思ったので、友人に連絡しました。彼は、竹橋の傍の建物に私を連れて行き、録音を聞かせてくれました、電話の……

友子　それが、証拠なんですね、こちら側が戦争を仕掛けようとしたと……

林田　私は、私の国の同胞たちの、ぐつぐつと煮えて吹きこぼれるようなエネルギーを、いいほうに向けたい、と願っているのです。いまが大切なとき、無駄な戦争は、犠牲は、避けたい……

友子　仲良くすればいいのよ……ね？……あなたたち、手を結べば！……（林田の腕をつかみ、組員たちの手もとろうとするが、彼らは逃げまわる）

島本　また、お前――出る幕じゃねえ、女のっ……

林田　ふふ、ははは……（明るく、愉快そうに）

ジープの音が近づく、何台もの。重なって、中国語でよびかわす声。

王の声「林大人っ、進駐軍だ！」など。ヘッドライトが交錯する。

林田　（中国語で）ああ、いま行く！……友子さん……あなたの言うとおりです。手を結べばいいのです。聞かせられた電話の録音

の、二つめのには、切れる間際に若い女のひとの声が聞こえていました……万国の労働者が団結すればいい……ほんとに、そう思います、私……むしろ今こそ、いまのこの時期こそが、チャンスなのだと……（王の声「林大人！」）すぐ行くっ……軍事裁判にかけられると、大変ですからね、なんとか食い止めないと……

林田、家の中から足を踏みだし、今度は英語で呼びかける……

「待ってください、いま、そちらへ行きます、林勝利が。待って……」去って行きかけると、友子が声をかける。

友子　あの……一つだけ……あのときの……あなたが、母に……

鈴が鳴り、あのメロディ。

友子　なんなんですか、あれ……

林田　（振り向く）私、非合法の活動を続けていて……あるとき、ある山を越えて行かねばならないとき……私は病気で、飢えて、道に迷って……このまま死ぬんだなと、私、熱に燃えるような体で震えながら、思いました……

遠い昔を、この国の、いや、アジアの……そんな郷愁を呼び起こさせるような歌が、高まり、すぐ低くなる。山中の風音。

林田　気がつくと、私は見たことのない人たちに、助けられていました……彼らもまた、旅をしていたのです……山の道を……

友子　どんな……どんな人たちなんです？……

林田　やさしくて、正直で……嘘のつけない人たちです。でも、私の嘘をとがめず、なお十日も動けない私を、けっして見捨てずに……あれは、あの人たちの〈歌〉です……

王の声「林大人！　急いで！」

重なるようにスピーカーで英語の声も―「その家にいる人、武器を捨てて出て来なさい……」など。

友子　もしかすると、私の父の――

林田　（首を振る）それ以上のことが、私には、わかりません……いまはもう、遠い夢のようで、ほんとうにあったことなのか、どうかも……でも、この節（ふし）……たとえ、あれが夢でも……夢を忘れたら、人は知らない、私の終わりのとき……私、そう、思います……

頭を下げて、林田歩いて行く。ヘッドライト作るその影が、大きく揺れる。あのメロディを口ずさみながら……それを打ち消すように、ラウド・スピーカーを通した英語の声が響く。「あとの人、武器を捨てて出てきなさい。あなたがたは、連合軍の命令に違反しています。すぐ武器を捨てて出て来なさい……」

音楽。

6

同じ島本運送店。ただし大分時日が経って、商売は上向きの様子。

夕刻で、今女事務員が帰り支度で去ったあとは、店には先生が一人、ギターをひいている。かなり上手。

やがて友子が、お茶と菓子を持って奥から。しばらく聞いている。

先生　（気づく、茶菓に）そんな……気にせんでください。

友子　だって、教えていただいてるんですから。どうぞ。

先生　謝礼は、十分いただいとります……（何か、息苦しい）さ、始めましょう。まず、いつものように和音、コードからです。（ひく）これは？……

先生が、例えばCコードをひき、友子が黙っていると、C、F、G7とひく。友子が答えると「そうです」と次に移る。友子が、どこかうつろで、黙りがちだ。あるいは、間違える。また、間違

えかける。

先生　（焦って）駄目です……音楽は、頭じゃない、耳で覚えにゃ。あ、耳は、頭か……戦争中は、飛行機の爆音を聞き分けるためにちゅうて、和音の教育をしました。それ自体は正しかとです。

さ、今度はご自分で、やってごらんなさい。

友子、コードを。先生「もっと指を立てて」「音が出とらん」など。――友子、やめてしまう。

先生　どうなさったんです。――早く曲をひきたいのは分かります、誰でもそうです。しかし、私の信念は、

友子　私、駄目みたいです……（先生を見る）

先生　そげんこと、なか。そりゃ、絶対音感は、こまか時でなかなら、難しいですばって……何です……

友子、ギターを置いて、茶箪笥の引き出しから本を出して先生に。

友子　お返しします。ありがとうございました。

先生　もう読まれたですか、ジョン・リード……（大事そうに手にとる）感想は。

友子　……え？

先生　「世界を震撼させた十日間」。読んで感想を語る。語り合う。で、はじめて読んだことになる、ぼくは、そげんに、

友子　……冒険なんですね。

先生　え……（ほとんど歓喜して）そうです、冒険です、ロシア革命は、十月革命は。人類最大の。……よく把握されたですね、本質を。

友子　序文に書いてありました、著者の。

先生　そうでしたか。

友子　あの、先生は、どうして……（先生「は？」汗を拭くなど）こ

れを、私に……私なんかに。（声が小さく）こんなものを……

先生　ああ、それは……感動したけんです、ぼく自身が。

友子　どこが、たとえば？……

ベースがＢＧレベルで――ここは「ワルシャワ労働歌」しかないだろう、歴史的にも。

先生　たとえば……ああ、たとえば……銀行はじめ、インテリの多い職場は、なかなか革命の側につこうとしませんでしたね……電話局も、ペトログラードの……戦って血を浴びて泥まみれの水兵や労働者たちが、交換台の並ぶ部屋に乱入したとき、交換嬢たちは震え上がり、それから罵り始める……汚い、無知なけだもの、豚、ちゅうて……しかし、彼女たちの技術が必要なので、委員たちは残ってくれと彼女たちに頼むけれど、同じ労働者として、と呼びかけられたのが、たぶん、誇り高い彼女たちを傷つける……彼女たちは、つい先刻まで立てこもっていたユーンケルの、貴族の士官たちに、弾薬を運んだり、怪我の手当てをしたりしとったんです。それは美しく、ロマンティックな行為だった……彼女たちは僅か六人を除いて皆残留を拒否して、胸を張って職場を立ち去って行きます……

友子　……で？

先生　私は、疲れて汚れて、たぶん臭気ふんぷん、ひん曲がるごたる、鼻ン――そげんだっただろう水兵や、労働者たちが、自分だ、って感じよったんです、読みながら……たぶん……

友子　ロシアの士官たちって……素敵ですものね、スマートで……瀟洒っていうのかしら……映画で……

ＢＧ音楽消えて、やがてコーラスのハミング。

友子　ごめんなさい、読んでないんです、そんなとこまで……

先生　どこまで？……

友子　難しくて。（微笑む）

先生　（傷ついているが、例えば、ギターを引き寄せてひきながら）ぼくは……親父も教師で……戦争が終わったとき、しばらく百姓をしました、二人で……間違ったことを子供に教えた責任をとらにゃ……そげん思うたとですばい……それが、新制中学の出来るけん教師の足らんちゅうて、また……はは……あはは……

友子　先生。

先生　ばって、子供たちば育てよるのと、土ばいじってそこに作物や草花ば育むのと、共通性のありますもんな……はは、発見したことのあります……ぼくが学校の音楽室で、ピアノソナタばひきよると、その窓の下の芋も花もよう育ちよります……園芸部の指導もしよるんです、いまの学校でも……百姓の経験のなかなら出来んとですたい……いまの教室の下の薔薇は、モーツァルトが好きのごとあって……

友子　先生。うちの母、駆け落ちなんですよ。……ふらりとやってきた父と……軽蔑します？

先生　いいや……どげな差別、偏見にもぼくぁ反対ですけん……

友子　冒険……ですものね。先生。

外から、ニッカーボッカー姿の島本、お供に安西を連れて帰って来る。戸を開けかけるところで、音響また音楽とともに、フリーズ。

照明も変わる。ほかに動く要素があれば、すべてフリーズ。生きているのは見つめ合っている友子と先生だけ。

バンドとコーラスが、舞曲を。すーっと友子が立ち上がって、先生に近づく。先生も立つ。そのまま二人の踊りになる。

コーラスは二人を遮ったり、助けたり、友子をリフトしたり。

曲の終わりか、途中でもいい、二人はひしと抱き合う。

音響また音楽で、――外から島本が安西をお供に連れて帰ってくる。

コーラスは離れ、友子と先生は何もなかった前の位置に戻っている。つまり、時間が前に戻った。一瞬の幻想だった。

島本　ただいま。……やあ、先生、ご苦労さまです。……どうです、こいつ、ものになりますかね、ははは……

島本、二人の雰囲気に気づいて、妙な顔になる。安西はとっくに気づいているといった顔だが、島本と目が合うと、とぼける。

友子が、たどたどしくギターを弾きはじめる。先生も。

コーラスが歌う。短く。

7

その夜か。同じ島本運送店。友子と島本。

島本　そらあ、何も取り柄のねえ男だ、俺あ……

友子　ね、そういうの止めない？　もう。――だって、あんた取り柄なかないじゃない。焼け跡から拾って来たリヤカー一台から、こうして立派な店張って、人様から社長の兄貴のって――立てられるまでになったんじゃない。ついてくる若い人もいるし、尻尾振って。

島本　そ、そらあまあ、そうだけどよ、はは。――拾ったんじゃないけどよ、それに、尻尾はねえさ、あははっ……

友子（なかば、心ここにない。うなずいて）リヤカーと、子分ね。いいのよ、説明は。リヤカーは焼け跡にあったんだし、安西さんが尻尾ないのは。パンツぬがして見ろすぐわかるってんでしょ。

（島本「あはは、あはは」）そういうことじゃないのよ。

島本　どういうことだい。

友子　わかんない。――いいじゃない、わかんなくたって。私、得

意なのよ、なにがなんだかわかんなくなるの、こう見えても、わりかし。

島本　（深くうなずく）

コーラス、ハミング。

島本　おれ……おかみさんに……お前のおふくろに、言ったんだ……きっと、友子さんを幸せにして見せます、って。

友子　武田さんじゃなかったっけ、番頭さん、そ言ったの。あ、あんただったっけ。どうでもいいわ。

島本　……よくない。

友子　だから……自分が言ったような気がしちゃったんでしょ。じゃないのに。いいわよ、べつに。それ、あんたのいいとこかもしんない。ごめんなさい。……やっぱりよくない……どうでもいいわ。

島本　お前……俺を、愛してるか。

友子　なにそれ。……（危険を感じた）きまってるじゃない、夫婦だもの。

島本　夫婦だ。……俺のこと、好きか。正直に言ってくれ。頼む。

友子　（軽く答えようとしたが、できない）わかんない……

島本　（懸命に）愛してるけど、好きじゃないのか。

友子　だから、わかんない。

島本　先生のほうが好きか。

友子　うん。（思わずとび出した答えに、自分で驚く）

島本　そうか、あいつのほうが好きか……愛してるか、おれより。

友子　（これが運命というものだろう、はっきりうなずいてしまう）うん。

これも、思わず手が出た。島本、友子をバシッと叩く。

とたんに音楽。

実は偶然に近いのだが、このとき、黒い影がこの家の前後に現れる。様子をちょっと窺う。

島本　（逆上してる。友子の手をつかむ）夫婦だって言ったな……来い。

友子　なに、何よ、いやっ。

島本、手を振り上げた。友子、頭を抱えて小さくなる。島本、後ろから抱きすくめる。

島本　新、新憲法だぞ……一つ、夫婦相和し……夫婦は同居し……同衾すべし……

奥（障子の）へ引きずって行く。

黒い影たち、覗きこんでいるが、音もなく身を隠す。

須藤が来た。

須藤　（小声で）御免。……島本の兄貴……寝ちまったかな、それとも……兄貴……姐さん……（コーラスが盛り上がり、障子が揺れるが、気づかない。時計を見る）時間がねえ……まあ、いいや……お前にだけは、謝りたかったってこと……振興会とのいざこざが、いまじゃご承知の通り深間にはまって、殺したり殺されたり、軍事裁判に送られたり、わけがわからねえ……足洗ってネスになってるお前を、無理やり引っ張りこんだな俺だ。俺あ、人を利用しよう、乗せようってことになると、歯止めがきかねえ。嬉しくってカッとなっちまって見境がつかねえ、餓鬼ン時の万引きと同じよ……へへ、ケチな野郎、安い悪党、あんまり安くって値がつかねえ……（遠い電車の音。また時計を見る）しょうがねえ、赤垣源蔵徳利の別れじゃねえが、タイヤに向かってさようならだ、世話になったな。これからあ、自分の身は自分で守ってくれ、見境ねえのは向こうさんも同じだ、気をつけろよ……

須藤、急ぎ足に出て行く。影が一つ、「兄貴」と声をかける。

ぎょっとした須藤、組員乙なので、ほっとして「何だ、手前か……」しかし、ぶすりと刺された。かすかな呻き声。他の黒い影、すっと出て来て、須藤を酔っぱらいの介抱のように担いで、ともども姿を消す。

島本、しどけない恰好で障子を開ける。

島本　須藤君……須藤君の声じゃ……（やって来た新しい影に）須藤君か？……

来たのは、先生。手に本と、薔薇の花。

先生　あ、今晩は……おそく、すみません……

島本　先生か……何です。……私が聞きます。

先生　はい……奥さんに、約束したもので……これを……この本は、やさしいと思います、「光ほのかに」アンネ・フランクの日記です。それから、この花……私が音楽室でピアノば弾くと、こっちゃ向いて伸びて来るとです。はは。気のせいか知れませんばってん……

島本　（制して）あの、失礼さんにござんすが……やりかけの用事、

あるもんでね……失礼します。

島本、障子に手をかける。

先生　奥さんに……おっしゃってください……私、急に転勤が決まりましたもので……たぶん、もうお目にかかれないと……じゃ……

障子を友子が開けかけると、島本が強く閉める。先生、足早に去る。

8

案内役、登場。

案内役　歩いています……それさえ、たしかなことじゃなくても

……とにかく……そんなつもりです……子供のころ、大人になったら出来るようになるんだって思い込んでいたことが、いくつかあります。箸をちゃんと（仕種で）使うこととか、外国語を読み、しゃべることとか……まだ、できません。おなじように、いつかは見えてくるだろう、と思っていたこと……それが複数やら、実は単数なのやら……どうやら、錯覚だったようです。……あ……また出会った……錯覚かもしれません、確かめてみましょう。

例の老婆、モク拾い。案内役、煙草を出してくわえるが、気がかわったようにポイと捨てる。老婆、信じられないものをみたように驚き、きょろきょろあたりを見て、歓喜して拾う。

案内役　おばあさん。

老婆、取り返されまいと固まる。浮浪児、飛び出して来て老婆を庇い、戦闘の構え。

案内役　いや、いいんだ、いい……（老婆と浮浪児、警戒を解かない）そうだな……いまは、いつ？……

老婆　……ああ、時間……（ごく汚い衣服の下から、立派な懐中時計）七時、八十分……

案内役　ありがとう……八時二十分てことだろうな……はは……

「夢の迷い道」のテーマが聞こえていた。振り返ると、老婆たちはもういない。……後ろを振り返りながら歩いて来た若い男にどんとぶつかられる。泰治だ。ボストンを持つとするか。

泰治　すみません……（急いで去る）

案内役　あ、君……（わかって）あいつだ……いや、ぼく……なんて言ったらいいんだ……あっ。（泰治を追って来たらしい男たちにぶつかられて、きりきり舞い）

泰治を追うらしい男たちが去る。すぐ泰治の仲間らしい男、ある

いは女が出て、つけて行く、あるいは追って行く。友子が急ぎ足に来る。安西がつけてくる。友子が振り向くと知らん振り。友子が去る。島本が来る。追って行く。湧きだしたように現れてぐるぐる回る人々（群集）の中に、先生の姿も見え隠れする。追う友子の通りすぎた直後に、あるいは常に死角に登場するかのようだ。女子学生が来る。再登場の泰治からボストン・バッグの類を受け取り、急ぐ。別の女子学生が泰治を追う、のか、逃げているのか……夢の追い追われのダンス。

右が基本的な関係だが、泰治に関していえば、自分を追っている可能性があるのは、①刑事たち②彼の属する多分左翼的な党派の派閥に対抗あるいは敵対する派閥③無責任な彼の貴任を問う女（たち）であり、逆に彼を庇ってくれるのは咲や中之郷だが、これらが重なり合って混線する。味方と思って頼って行くと実は白いのっぺらぼう（仮面）だったり。ボストン・バッグ（大事な、かつ危険なものらしい）を確かに仲間らしいのに渡してホッとすると、人々の中をパスされて渡って来て、また自分に回って来たり……それを投げ捨てようとするのか、放り込もうとするのか、とにかくバッグを客席に投げかけると、案内役が必死になって止める。——たちまち、他の人々の動き（踊り）に呑み込まれる。もちろん、友子から見た夢としての展開もないまぜに。

音楽が変わると、追い追われる関係が全部逆になる、気づいて戻る、などなど、すべて舞踊的に。

最後は、中央に放置されたバッグから風船が膨らみ、大きく大きくなって、ついにはじける。など、候補として。

案内役　（息を切らして登場）ごらんになりましたか、私、過去に干渉……つまり、過去の自分、甲野泰治に干渉して、彼の行動を変

えさせてしまった……すると、その結果として、時間空間に歪みが出来、みりみりと亀裂が走り、この世界は木っ端みじんに砕け壊れて宇宙の闇の彼方に吹っ飛んで――しまわないようですね……すると、あの、私には何だかわからない鞄を、ぶん投げなかった私の、結果として今の私がある……待てよ、ということは、私が過去の自分に、甲野泰治に働きかけて、もうすこしはましな現在の私を――つまり、いまのどうしようもない私を、変える、べつの人生を歩ませる――ことが、あるいは……

コーラスの一人が来て「あの、休憩ですけど」案内役「え?」なるほど、もう客席も明るくなりはじめている。案内役「あ、はい、つづきは、後ほど……」慌てて退場して行く。

休憩。

9

咲と中之郷夫婦の店「小ゆみ屋」。もう閉まっていて暗い。

激しく扉を叩く音。

店の中は少し広くなっていて、小さな長椅子に人が寝ているらしい毛布の塊。泰治がそこから首を出し、すぐまた毛布をかぶる。

扉を叩く音。……奥から咲が眠そうに出てくる。「はーい……誰、こんな時間に……もう看板です、とっくに……近所迷惑ですよ、やめてください……」叩く音は、やや遠慮して……だが、すぐ堪えきれないといったように高くなる。

咲　はいはい、今開けます……

泰治　（脅えて、低く）おばさん……もしかして、おれの……

咲　さ、味方かな、それとも……へへ、あるいはまた、別口の彼女かな……

咲がドアの小窓から覗いた感じ。すぐ無愛想に開ける。

入って来たのは、憔悴した感じの鳥本。無言で見回す。外には見張りふうに安西。

咲　なにさ、島本さん……（少し大きな声で言った）

咲の後ろに中之郷が顔を見せる。

泰治　（首だけ出して）なんだよ、島さん……

島本、近づいて毛布を引き剥がす。きゃっと叫んだのは、泰治に寄り添って寝ていた女子学生。

中之郷　島ちゃん、往生際が悪いぜ。

島本　酒。飲み屋だろ、ここ。お咲さん。

咲　（中之郷がうなずいたので）一杯だけよ。

中之郷　無茶な博打を張ってるそうじゃねえか。振興会のシマでよ。

島本　余計なお世話だよ、郷さん。

中之郷　そりゃそうだ……だがよ、むしりとられた挙げ句、戦争ごっこの口実にされるのが落ちだぜ。

島本　しつこいのは嫌えだろう、あんたも。

中之郷　ああ……

島本　勘定。

咲　いいのよ……

島本　（構わず紙幣を置いて、出て行きかけて）あいつに会ったら……判子をついてここ宛に郵送するって、そ言ってくれ……（出て行く。外の安西も）

ほっとした空気が流れる。泰治「離婚届か……」咲「（奥、あるいは二階、梯子段の一部だけ見えてる――に向かって）帰ったわよ」

友子が姿を見せた。

中之郷　財産、あらかたすっちまったらしい……（島本のこと）

友子　それはいいのよ。あの人がつくったものですもの、裸一貫で。

咲　それは違うんじゃないかな。だって、友子さんがいなかったら、あの人、何も……（友子、首を振っている）

泰治　おれもそう思って、弁護士に相談したのさ。築きあげたものの半分は妻のもんじゃないかって。

咲　左翼の事件専門の、でしょ。

泰治　妻のほうが別れたい場合は、駄目だって。ま、意味なかったわけだけど、結局。

咲　新憲法でも……

友子　いいんですってば、それは……ゼロから出発したいのよ、私。

女子学生は、服を着て、カウンターの中へ。

咲　（溜め息まじりに）弓屋の娘ね。……ね、で、どうしたの、その「先生」って人と……転勤先の大阪までおっかけてって、会えたのね？……どうなったの？……

友子　しばらく、会わないことにしたの。

皆、意外だ。

咲　しばらくって……どのくらい。

友子　七年。

咲　七年っ？……（口をぱくぱく）

友子　だって、それだけかかるのよ、先生のお子さんが大学出るまで……一人前になるまで。……先生は責任をとりたいのよ。だから、私たち、約束したの。

咲　誰と、先生と？

友子　と、先生のご家族と。

咲　七年間、会わないって？

友子　うん。
泰治（がっかりしたように腰を下ろす）
咲　で、その間、友子さんは一人でいる（友子うなずく）……先生は、ご家族と？
友子　そうよ。
咲　（中之郷、泰治と顔を見合わせた）……妬けない？
友子　（フォルテで）だって、信じてるもんっ……
咲　……で、七年経ったら……一緒になる……（不安まるだしの顔を、一変させて）ロマンチックだねっ、七夕さまみたい、あ、ちがうか……ありゃ、年に一度会うんだ……
ドアが開いて、島本が再び顔を出す。一同、緊張。
島本　やっぱり……分かってるんだ、弓屋の連中のやりくちは……（中之郷、身を乗り出す。島本、両手を挙げてそれを制して、友子に）一目、会いたかったんだ……なんてえか、こう、気障に、粋がって……センチメンタルって感じに決めたかったんだ……駄目だな、俺、生涯半端で……（顔をくしゃくしゃにして）お前、前より綺麗だ……（身を翻すようにして去る）
咲　ちょっと島本さん、あんただって弓屋の……行っちゃった…
「どけどけっ、この薄らトンカチっ」と怒鳴ってる島本の声が遠ざかる。案内役が来る、どうやら島本に出会い頭に突き飛ばされたか。
咲　で、友子さん……どうするの、これから、食べてくの。
友子　洋裁やろうと思うの。前からやりたかったんだ。泰ちゃん、あんたの友達のお母さんで、洋裁学校開いてる人いるでしょ。
泰治　ああ、牧野百合女史。
友子　紹介して。
泰治　いいよ。経験あるの、お姉ちゃん。

友子　ぜんぜん。（例の微笑を浮かべる）

音楽とともに暗くなって、多少の模様替え。

案内役　あの笑顔がどうも、いけません。なにか邪悪なことが起こりそうで……ところで私は申し上げた通り、過去の私に会って、かなわぬながら努力してみよう、と思いました。むろん、夢の中で、ですが――私にはどうも、はっきりした区別がますますつきにくくなっているようです、自分は果して蝶ではないのか、甲虫でも……

10

同じ「小ゆみ屋」。さして日時の経っていない夕方、つまり飲み屋にはまだ開店前。咲の仕込みを泰治が手伝っている。前掛けなどは一人前で。

咲　じゃなに、信じないってわけ？――泰ちゃんは。

泰治　だって、無理でしょうが。（働きながら）いいたかないけど。

咲　そりゃそうだ。――でも、なぜ？ 弟のあんたが信じなくてどうなるのよっ。

泰治　ああ、信じないね、ぼくは。だって、自分だったら……

咲　（気を抜いて）泰ちゃんはね。

泰治　つまり、自分を信じないんだ、られないからさ、ぼくは。

咲　私は信じる。

泰治　七年だよ。

咲　長いよね。でも、私、信じる。先生って人よく知らないけど。

泰治　……そりゃ、おばさんが、おばさん自身を信じてるからさ、結局。

咲　そうかな。違うと思うな。られないから信じるってことあるじゃない。自分は当てになんないけど、だから、おかみさんをっ

て……そういう人だったのよ、あんたのおっかさんは。……だから、いまは私、友子さんを信じる。

泰治　ふうん。なんか、そういうのって……健全じゃないって気がする……

買い物を抱えて、女子学生（瑞枝）が帰ってくる。

咲　おかえんなさい、ご苦労さん……

泰治　おふくろのことだってね、わかんないんだよね、息子としては、もうひとつ。

咲　あんたはだから駄目……あ、どうしたの？……

瑞枝がふらふらした。「大丈夫……」奥へ。

咲　（ぼかんとしてる泰治に）予想しておくべきことが起きたのかも……やることやったんだから……（奥へ）

案内役が来る。ＭＥあり。

泰治　すみません、まだ……

案内役　いや、いいんです……実は、きみに……

泰治　ぼくに？

案内役　そう。……ちょっと、むずかしい、というか、込み入った話で……いや、単純といえば、単純……

泰治（思い出した）ああ、私の父をご存じの……親戚のかたでしたよね、父方の。

案内役　はい、ごく近い……あ、いや、父方というだけでも——

泰治　失礼ですが、お話、ききたくありません。どんなことだかも知らないで失礼ですけど……ぼく、原田家にいい感情、持ってません、あまり……

案内役　わかります、ぼくも、かつてはそうだった、よくわかる、当たり前だけど……

泰治　小さいときは何も分からなかった、それが不愉快です……

咲、奥から。「いらっしゃい、まだちょっと……」

案内役　どうも……原田です、いつぞやは……

咲　ああ、ご親戚の……ま、どうぞ……どうぞおかけに……

泰治　（何かごそごそやっていた）おばさん、レコードかけるよ。

咲　いいけど、何、いまごろ。

泰治　今頃じゃないとかけられないレコードさ。ドアをしっかりしめて聞けっていうんだけど、自分の部屋なんて持ってる奴、俺、知らないから……

鳴り出すのはビル・ヘイリーとヒズ・コメッツの「ロック・アラウン・ザ・クロック」

咲　（顔をしかめて）泰ちゃん！……低くして、低くしてってばっ……

泰治、低くしない。

そろそろ出て来たこの街の人々が、「お？」という感じで、少しずつ寄ってくる。もちろん咲さん同様「うるさいねっ」という大人も。瑞枝も出てくる。合わせて体を小さく揺する。次第に元気に。

泰治、ちらと見て、内心ほっとする。

咲　（自分も乗りはじめる）興奮するわね、結構。

コーラスがレコードを引き継いで歌っても、「母の写真」同様、レコードはコーラスが歌うと決めておいても。ただし、ここではコーラスは街の人々と区別がつかない。外の連中、だんだん盛り上がって来る――その中に、悄然と安西が来る。誰も気にとめない。

中之郷が走りこんで来る。

中之郷　おいっ……（レコードを止める。コーラスも止む）島本が……

咲　え？……島本さんが？

中之郷　死んだんだ……（咲、泰治「ええっ」）警察の発表では、自殺だがな……

安西が声を立てて泣きだす。

一瞬ののち、またコーラスと街の人々は陽気に盛り上がる。

案内役が前へ出てくるにつれて、その音も人々もすーっと引いて行き、ブリッジ音楽に。

案内役　島本さんの死は、結局真相がつかめませんでした……下山国鉄総裁の自殺か他殺かがついに決め手を欠いたままだったように……五十年代でも、法医学の発達はまだまだだったのです……彼の冥福を祈るほかありません……

11

バンド席に、きりっとした女性（リーダー）が姿を見せ、打ち合わせよろしく。舞台には、できる限りの人数が登場する。

リーダー　みなさん、今日は（などといったかどうか、作者は詳らかでないので、この当時の経験者である音楽監督にこの場の処理は相談）……ええと、今日はまず、赤の本を開いてください。その××頁……

ロシア民謡から、たとえば「黒い瞳」など適宜に。歌う人々――うたごえ喫茶の観客たち――の出来が悪ければ、リーダーがどんどん変える。

オペラ歌手の如き、実はコーラスの一人が、立ち上がって朗々とソプラノのいい喉を聞かせる。彼女がカデンツァに入ると、他のコーラスの一人が、ジャズふうのスキャットで掛け合いになる。うまく行けば、大勢がロシア民謡とジャズに分かれて対抗したい。

リーダー（いいところで止めて）平和共存です。

以下、よろしく仲良くある。盛り上がったら早めに終わる。

12

咲夫婦の店「小ゆみ屋」が、だいぶ大きくなった。といっても大きなクラブに変身したように見えては困る。とまり木とテーブル席が二つ三つ、あとは芝居の都合上、拡がることが出来るようになっていればよい。夕方。

泰治がコップ磨きなど、ふと窓の外を見て、

泰治　やばい。（奥へ姿を消す）

二人の男がドアを押して入って来る。刑事らしい。

咲が奥から出てくる。.

咲　いらっしゃい……（警察手帳を示されて）ああ……ちょっとよ見せて、見たことないから、だって、警察のかたかどうか……

刑事1　（苦笑して、もう一度見せて）この店は、振興会かい。（咲「へ？」）どこに割りおさめてるんだときいてるんだ。

咲　さ、そういうことは、主人が。ほほ。

刑事1　面白いのが、出入りするらしいな。（咲がまた「へ？」）まあ、いい。この顔、知ってるね。（写真を）

咲　あら……まさか（と言いかけて、ごまかし）やっぱり違うわ、知らない。（二人がじっと見ているので）はは、だって、いい男じゃない、映画スターかと。

刑事2　おい、見え透いた嘘を、

刑事1　（止めて）ママさんよ……俺たちはな、（写真を叩いて）助けたくて言ってるんだ……いつまでも戦後じゃない……これがきっかけで、また殺し合いがおっぱじまるのはまっぴらだ。独立国なんだからよ、もう……とにかく、こいつの面見たらすぐ連絡してくれ。頼んだぜ。

二人が席を立ちかけると、息せき切って友子が飛び込んでくる。
かなり洒落た服装になっている。

咲　友子さん！……

友子　ごめんなさい、まずい人に会っちゃって……ちょっと……
（奥または二階を指して、カウンターの奥へ姿を消す）

刑事２（呆然と見送ったが）あ、あの、悪漢に追われてるようだったら、自分らが、
刑事１「野暮は止めろ」と首を振って「じゃ」―２と共に去る。

咲　どうも……こんだお客さんでいらしてね……
泰治、表のドアから帰ってくる。後ろから瑞枝。上（奥）からは友子が階段の途中からのぞく。

咲　（泰治に）お帰んなさい。お門違いだったわよ。（瑞枝を見つけて）あら。

泰治　その代わり、こいつにつかまっちまった……

瑞枝　……（ただ頭を下げるだけ）

泰治　（姉に気づき）お姉ちゃん……何してるんだよ。

友子　この屋根裏部屋から、外の道、よく見えるのよ……ま、助かった、危ないところ……（出てくる）ありがとう、お咲さん。

咲　どうしたの、いったい。誰かに……

友子　牧野百合先生にね、大通りで、ばったり……

咲　鉢合わせ。

友子　しそうになったけど、しなかったけど。私、さっと横丁に逸れたから……でも、百合先生もこっちへ折れて来るみたいだったから、何だか。もう、あわててここへ、

咲　飛び込んだ。（「そ」と友子が笑うので自分も笑うが）で、なぜ？

友子　えへへ。具合悪くて……行ってないから、ここんとこ……全

然。

泰治　（中っ腹で）心配してるんだぜ、百合先生、お姉ちゃんのことを。優秀だから二年たったらご自分のアシスタント教師に……

咲　いま、まだ（指を繰る）……なぜ止めちゃったの、洋裁。

友子　やめてない。（咲「え？」）お店、開いちゃったのよ、私。K町で。

泰治　何だって……出来るの、そんなこと。ズブしろ（素人）だったんだろ。

友子　うん。でも、出来てる。お客さんついてるし。（お化粧を直しながら）あ、泰ちゃん、謝っといて、牧野先生に。（「えっ？」）あんた、年寄りの女の人に好かれるじゃない。私は若いから、わかんないけどね、あんたの魅力なんて。弟だしね。

泰治　（瑞枝に）座んなよ、突っ立ってないで。そこら。

友子　（咲に）心配しないで。あのね、私、もしかすっと、とてもいいこと、あるかもしれない……ううん、まだ言えないけど、えへへ。

音楽、BGレベルで。

咲　なんだか、変わったわね、友子さん……ぴかぴかしてる。

友子　あそう。うふふ。私って、一種の二重人格かな……半分の自分は、軽薄で、いい加減で、口説かれたり、下品なこと言われたりしても、わりかし平気で……でもう一つの自分は、深刻で、純粋なのよね。でも、それを人に知られるのも嫌なのよ……いい方の私を無理やり表面に引っ張りだすと、十五分も持たないわ……わかる、泰ちゃん？

泰治　質問。誰が？……

友子　だれがって。

泰治　誰さ、その私って、誰、お姉ちゃん？

友子　……私で、アンネ・フランクよ。「光ほのかに」……（お化粧終わった。時計を見て）さ行かなきゃ。（振り返って）泰ちゃん……

へへ、「青年は老人より、心の奥底ではつねに寂しいのだ」なんていうわよね。知ってる？

泰治　何の本。

友子　ある本。知らないのよ、アンネが書いてるの、ある本で読んだって。

ドアが開いて、林田（林勝利）が来た。

友子　あら。（咲も同時に「あっ……」）しばらく……

林田　どうも……久しぶりで娑婆に出て来ましたもので……（咲に）覚えていてくれて、ありがとう。

友子　私、ちょっと急ぎますもので、失礼します……じゃあね……

泰治　（後ろ姿に）お姉ちゃん……この前、車習いたいなんて言ってたよね……

友子　ああ、もう乗ってる。（出て行きながら鼻唄、たとえば）長い旅路の、航海終えて……

友子、出て行った。

林田　きれいになりましたね、お嬢さん、弓屋の。……女の人は、いまの私には、皆きれいに見えるけれど……長野の刑務所におったんです、軍事裁判で……

咲　そう……なにか、作ります？（林田うなずく）

泰治　（瑞枝に、小声で）上、行くか。

瑞枝　（首を振る、同じく）あなた、したがるもの。

泰治　よし、じゃここでいい。

瑞枝　……どうしてほっといたの。こんなに長く。

泰治　だから、出かけてたんだ、農村へ……文化工作ってやつで

さ、危険なこと、別に……

瑞枝　大切なことだったのね、私の傍にいられないほど……

泰治　（憂鬱だ）だから……君が世界の中心じゃないんだ……外へ出よう、歩きながら話そうや。

泰治と瑞枝、店を出る。泰治がちらと見えた人影に「あれ？……」「なに」「友達かと思ったんだ……中学時代の……」二人、いったん去る。サスペンスふうな音楽。

店の中。

林田　そうですか、弓屋はなくなって、貯金は全部封鎖されて……

咲　結局、疎開して助かった荷物の売り食いですものね、文字通り竹の子。

林田　お辛かったでしょう、おかみさんも……坊やも……

咲　泰ちゃんなんかいいほうです、中学止めて働くってことになって、そしたら、戦争中に死んだ大学教授の……息子さんが泰ちゃんの友達でね、そのお母さん、つまり教授未亡人がね、戦争中軍部なんかに苛められたかたで、その教授が、で、その分、戦後になって本が売れましたでしょ、その印税ってんですか、息子一人に使わせちゃ為にならないからって、貧乏な子のためってわけで、泰ちゃん、引き取られて……おばさん、おれショートケーキってもの初めて食べたよ、ですって、はは……下町じゃ、お煎餅か大福ですもんね、ははは……で、大学まで……

林田　それはよかった、ついてるんだ……ははは……

外に安西の姿がある。店の中はいったん暗くなる。

外の道端。泰治と瑞枝。もう夜更け。

別の音楽、できればコーラスのハミング。

瑞枝　電信柱の広告さがして、行ったわ、一人で……小さな病院の、すりきれた畳の上に横になって煤けた天井見上げてたとき、もの凄くみじめになった……絶対許せないって思った……

泰治　……（答えようがない）
瑞枝　何黙ってるのよ……おしゃべりのくせに。いつも。
泰治　黙ってるじゃないか、君、いつも……
瑞枝　下手だからよ、苦手だから……
泰治　得意だってわけじゃないさ、おれが……、（ふと、気を取られた）

男たちが二、三人、静かになにげないふうに通って行く。いうなら、その静かで何気なさすぎるのが、気になった。低く音楽。

瑞枝　どうしたの。
泰治　べつに……いいんだ……
瑞枝　じゃ、帰るわ。
泰治　そうかい。
瑞枝　こっち向いてくれる……顔、こっちに……
泰治　いいよ……

泰治、顔を寄せる。とたんにバシッと腰の入った平手打ちを食らう。足早に去って行く瑞枝。同じ音楽が大きくなって静まり……「小ゆみ屋」の店の中。林田が「私の写真を……」と眩いている。

咲　ね、命を大事にしたほうがいいわ。ね？
林田　それでも、私は、警察に保護を求めはしません、日本の。
咲　でも、ここで死んだら、何にもならないよ、犬死にだよ……死んだ武田さんが、命がけであんた助けたことだって、無駄になっちゃう……
林田　犬死に……そうですよね（咲「そうよっ」と力むが、首を振って）……犬みたいでしたよね、弓屋の裏口のごみ箱の陰に、私……いつかの山の中でも、そうだった……

あの鈴の音。例のメロディ。

咲　お国の人は、助けてくれないの？……あなたの派が、天下をとったんでしょ？

林田　お咲さん……私、とっくに……とても説明できない……ただ、私、国よりも友達を、義理を、大事にしてしまったようなのですよ……

咲　ああ、わからない。そんなこと沢山あるんでしょう、日本だって、どこだって。だけど、死ぬことはないわよ、なにも、そ、絶対っ……（ドアにノック）誰？、今日、もう……

安西　おれ、泰治君の同級の……

咲、小窓を覗いて、見知った顔なので安心したようだ。安西を中へ入れ、また鍵をかける。

林田　（かすかに見覚えがある）ああ、いつか……

安西　いまは、振興会にゲソつけてます、おれ……

林田　（うなずいて）出よう。

二人、出て行く。外に影。音楽。

咲　あ、あんた、ちょっと……警察呼ぶよっ……

奥から中之郷が出て、咲を抑える。

中之郷　やめろっ……やめるんだ……どうにもなりゃしない……

咲　だって、あんた……どうにもって……どうにか、どうにかしてっ……

泰治が悄然と戻ってくる。暗くなりはじめると同時に、銃声が轟く。

二発、三発……また聞こえていたあの音楽も、ふっと切れる。

13

すぐに、ロックの響き。コーラスが出て歌う。後の都合があるので人数の変化がある。長い揉み上げの、腰を揺すって踊るのがい

る。そう、ここは「小ゆみ屋」でありかつ「ロカビリー喫茶」でもあるといった趣。咲も中之郷も、着替えの必要がなければ観客として参加。その他なるべく大勢。

ロカビリー・メドレーのいいところで、めっきり瀟洒なスタイルに変身した友子が、後ろを振り向きながら逃げてくる。むろんハイヒール。コーラスの前を通って後ろに隠れたり。度の強い眼鏡をかけた痩せた男が追うように登場。「友子さん、待って……友子さん……」乗り乗りの観客たちの間を縫い、コーラスの前を通って入る。

友子、ほっと一息。咲・中之郷、心配して寄って来る。「どうしたの」友子「ううん……あ、また……」眼鏡の男が戻って来た。友子、逃げるところがない。とりあえずコーラスの仲間に入って歌う。眼鏡の男、前を通るが気づかない。しかし、次の瞬間「？」となる。友子急いでコーラスの陰に隠れて移動――つまり、コーラスも歌いながら横へ蟹移動する。眼鏡も。

友子はようやく舞台にちゃんと存在する「小ゆみ屋」の奥へ逃げ込む。眼鏡の男、彼女を見失って、咲たちに――

森泉　（眼鏡の男）あのあの、ここへ綺麗な女の人、来ませんでした？（咲が自分の鼻をさす）ちがう、もっとすごく綺麗な人。

中之郷　なんの御用です。

森泉　いるんですね、友子さんっ。

中之郷　いや、いないけどさ、いないけどね――

咲　あんた誰、何で追っかけてるの。

森泉　あ失礼、ぼく、こういうものです。（名刺を渡す）

咲　アンノーウン株式会社デザイン室――

森泉　これ、ぼくと甲野友子さんで作ったんですけどね、デザイン室――あ、間違えた、こっちの名刺、新しいの。

咲　森泉源五郎……名前だけね。

森泉　ま、この業界では、

咲　だけで通る。

森泉　てへへ。でね、ぼく、友子さんといっしょに……へへへ……

話しつづける。なんだか、とてつもなく大きなことをやると吹いているらしいが、再び盛り上がるロカビリーの前には、ＰＡしても無駄である。

この気障な男に咲と中之郷がかなり顰蹙（ひんしゅく）している……というのは、話の内容もどこか千三つくさくて、理解できないし、なにより彼の雰囲気が、どこか前編「母の写真」で友子と出来合ってしまった男、高見沢を思わせるかららしい。夫婦の様子でそれがわかる。

が、なんと、そっと顔を覗かせ耳をそばだてている友子の目は輝いており、次第に近づいてくる。咲が気づく、呆然。中之郷も。

ロカビリーの曲が、しつこいエンディングに入る。

友子　（音の切れた隙間に）森泉さん……

森泉　あっ、友子さんっ。

友子　源五郎さんっ……

二人、歌手たちが飛び上がる最後のエンディングにあわせて、ぎゅっと抱き合う。

咲と中之郷、顔を見合わせる。他の女の子と親しくしていた泰治も。拍手喝采で、客たちの中にまじって友子と森泉は去り、ロカビリー歌手をはじめコーラスは、扮装を解きはじめる。

舞台は、そのままある夜の「小ゆみ屋」の光景になる。年の暮れ。

14

「小ゆみ屋」は、かなり綺麗になっている。もうすぐ六十年代、と思っていただきたい。いま活躍していたコーラスの連中（3人）は、ここの従業員かアルバイトというわけ。中之郷もいて、片付けに加わっている。泰治はいない。

咲　さ、今夜はお店、これからは貸し切り、一般の方はお断り。どんなお馴染みさんでもよ。もちろん、知らない人は入れない。入れる前に、かならず私が、ええと、首実検する。いいわね？

コーラスたち　はあい……（奥へ着替えに行ったり、それぞれ）

コーラスの一人（雪子）　今日のパーティ、どんな人達なんですか？

咲　それはね、秘密。

コーラスの別の一人（月子）　でも、お客さまに合わせて準備しないと、歌。

また別の一人（花子）　軍歌ばっかりだと、こないだみたいに。

（三人）ねーえ。

咲　大丈夫よ。どっちかっていえば、懐メロかな。バンマス（音楽監督）と打ち合わせして。（三人「はーい……」以下適宜、雪子「ね、ね、懐メロって？……」など）

外から馴染み客らしいのが「おーい、どしちゃったんだあ……小ゆみ屋あ」

咲　（戸口で）ごめんなさい、今日貸し切りなもんで。すみませんん、またご贔屓に。ん、明日ね、グッバイ……

案内役が飄然と来る。ドアを通らずにすっと入って、とまり木に。

咲　あ、びっくりした、どこから……ちょっと今日は……まいいか、親戚ですもんね、泰ちゃんのお父さんの。何になさる？

案内役　ハイボール。

咲　あら、珍しいものお好きね、いまどき。炭酸、あったかな。
中之郷　仕入れて来る。
案内役　（慌てて）いや、いいです、いいです。じゃ、ウーロンハイ……はまだ早いか……水割り……
咲　水割りですね。ウィスキーは？
案内役（ほっとして）あ、それで結構。
咲　はいはい……先生って言ってらしたわよね。どこの？
案内役　専門学校です、短大の講師も、ちょっと……
　ドアがそっと開いて、顔をのぞかせたのは、梅、弓屋の一族の。
コーラス月子　いらっしゃいまし、あの……
梅　こんばんは……こちら、小ゆみ屋さん、ね？……立派になっちゃって……
咲　お梅さんっ……（狂喜して、抱き合う）元気ね、よかった……
梅　でもね、白髪が、ちょっと。
咲　（言下に）染めてんでしょ。さ、どうぞどうぞ。
梅　（中之郷とも挨拶あって、咲に）ね、ね、元弓屋の仲間に招集がかかったってことは、今日はなに？……この前はさ、五、六年前かしら、ほら、泰ちゃんが警察からと仲間からと、両方から追われてて、その味方だった仲間がこんだ敵になっちゃったからまた敵がふえて、大変なんだ、どっか隠れるところはって相談だったじゃない……また、泰ちゃん？
咲　泰ちゃん、もうじき来るわ。相変わらずふらふらしてるけど……女の子ばかり変えて。
梅　まあ、誰に似たんだろう。
咲　ま、ゆっくりして。（時計を見て）急いでもしょうがないし……
梅　（問い詰めても駄目なことがわかってる）じゃ……一つだけ教えて、これだけ……じゃないと、私、どきどきしちゃって……心臓

がね、近頃……

咲　大丈夫よ、お梅さんは。なによ。

梅　いいことなの、悪いことなの、今日、これから起きることは……

咲　（顔を曇らせて）そうねえ、それがわからないのよ……ね、とにかく待つしかないのよ、私たちは、今夜はね。……いつものでいいのね、昔っからの。（多分日本酒）

梅　そう……いいわ……（ふいに、顔を輝かせる）

コーラスとバンドが、梅さんご存じの曲を練習しはじめたのだ。

梅、すーっとそのまま、コーラスの前に入り、いいタイミングでソロを取る。

ややあって、泰治が、稚なっぽい女性紘子と来る。

咲　いらっしゃい――ませ。

泰治　（一応外套に背広）冷えて来たよね、雪になるかもしれない。

紘子　へーえ、こんな店知ってるのね、あなた……

泰治　（咲に）構わないでしょ、彼女。

咲　（小声で）構うって言えないでしょ、あんたの問題だもの。珍しい人、来てるわよ。（梅のこと。中之郷に）私にも作って。水割り。

中之郷　お前が緊張してどうするんだ、そんなに。

咲　だって、大事な夜だもの。

泰治、梅と手を振り合ったりして、片隅のテーブルに紘子と。注文など、よろしく〈紘子は「ヴァイオレット・フィズ」位かな）。

梅とコーラス3人の歌、盛り上がって終わる。拍手。

すぐ次の歌の選択。梅「クリスマスだから、もうじき……」など。

咲が注文の品を泰治たちのテーブルに届けるあたりから、泰治と

紘子の議論、というより口論になる。

紘子　だけどね……ううん、だから……私たち、若いでしょ、まだ……未熟でしょ……だから、意見ききたいのよ、大人の、大人の人の。

泰治　きみ、はたち過ぎたんだろ。成人だろ。

紘子　ちがうの。あなたは……いまは、いま信じてることを正しいって思ってる、信じてらっしゃる……

泰治　当たり前じゃないか。誰だって。

紘子　でも、それ、変わるかもしれないでしょ、いつか。それが怖いの、私。

泰治　何言ってるんだ、そんな話じゃないだろ、今の話。

紘子　……どんな話？

泰治　だって、ま、俺を信じないのはいいさ。もっともだとも思うよ。でも、いまはマルクスの話、してたんだぜ。——世界の人間の、少なめに見積もっても半分が、いまその影響下にあるんだ、よくも悪くも。大人に相談するって、そんな話じゃないだろう。

紘子　ね、お願いだから、興奮しないで、そういうあなた、嫌いよ。

泰治　何だよ、おとなって。年とってるってことか？……毛沢東、七十近いぜ。マルクスなら百五十だ、生きてりゃ。

紘子　（笑う）そういう話じゃないでしょ。（時計を見る）あ、もうこんな時間。（と立つ）

泰治　君……だって、今夜は……

紘子　あなたのこと、家に言ってないのよ、まだ……

梅とコーラス、ムード歌謡って感じの、ま、ラブソングをしっとりと歌っている。

咲、オーバーを紘子に着せかけてやろうとしながら、泰治に「あ

んたがやりなさい」と目交ぜ。泰治がもたついてるので、咲、オーバーを手から放す。オーバーは床へ落ちる。紘子は当然のように背を向けたまま。泰治が拾って、着せかけてやる。

紘子　それじゃ、甲野君、メリー・クリスマス、ちょっと早いけど……それから、よいお年を……

紘子去る。泰治はカウンターで中之郷から飲み物を貰い、一人テーブルに戻る。

咲　そうか……もうクリスマスなんだ……（時計を）もうこんな時間……

中之郷　咲……いらいらしたってしょうがねえだろうが、お前が……

咲　だって……（ドアが開く気配に）あ……いらっしゃい……

のぞいたのは、これも弓屋の元メンバー、加代。

咲　加代ちゃん……

加代　お咲さん……お梅さんっ……

三人わっと抱き合う。「かわらないわねえ」「老けたわよ、やっぱり」など、など……

案内役が、これをしおにテーブルの泰治に近づいて来る。

案内役　お話、いいですか、ちょっと……

泰治　ああ……親父の……

案内役　ぜひ……聞いてほしいことがあるんです……ぜひ……

泰治　どうぞ……何ですか。

案内役　君は……自分が、いまの自分が、変わらなくちゃ、とは思いませんか？……なんとか今の自分じゃないものになろうと、すこしでも、ましな……気に障ったら失礼、でも……

バンマスと雪子たちが、なにやら相談して、彼はイントロを弾き出す、かなり装飾をつけて……次第に「My Blue Heaven」だとわ

かるように。

案内役　で、これは君だけに関わる問題じゃないんです、実は……君はまだ若いし、これからさき、いろんな別れ道に立つと思う、その、人生の……君の選択しだいで、ぼくも、いや、世界が、変わって来る……わからないかもしれないけど、いまは、しかし……

コーラスに梅・加代そして咲が加わって、どっと歌。「私の青空」

その間に、案内役は泰治に熱心に語りつづける。

やがて、歌が終わる。自分たちで拍手。次の歌の相談。

泰治　ええ……そういうの、読んだことがあります。ダンセニーという人の「もしもあの時」……アイルランドの……

案内役　「Ｉｆ」ですね。いまじゃ同じテーマが、映画にも……いや、映画はまだ早いけれども……

泰治　でも、ぼく、嘘だと思うんです。

案内役　え、なにが？……嘘って……

泰治　近代ヨーロッパの嘘、ってんじゃありませんかね。人間を、自分を過大評価して……自分が変われば世界が変わる、なんて、自惚れですよ、ぼくに言わせれば……変わりゃしない、何やったって、どうしたって……そりゃ多少の波風は立ったって、結局なんだかねっとりとしたものに吸い取られて、いつのまにか大した違いのないことになっちまう……そんな気がしてならないんです……

案内役　違う……

泰治　違わない……おかしいですね、年の若いぼくが、ずっと先輩のあなたに説教してるみたいだ……でも、夢ですよ。お代わり、いいんですか、同じので。

案内役　違う。

泰治　じゃ、何にします？
案内役　うまく言えない……でも、つまり、要するにぼくは……ぼくのようになってほしくない……ぼくは、つまらない人間だ……でも、ぼくは、君に、そんなにふらふらウロウロしててほしくない……
泰治　言いますね。（お代わりを花子に頼んだり）
　　咲、時計を気にしながら、飲むピッチが早い。案内役の言葉を小耳に挟んだ。で、いきなり口を挟む。
咲　そうよ、泰ちゃん……私もそう思います……私は、いいえ、私たちは、あんたにふらふらしてほしくないっ……
泰治　どうしたのさ、おばさん、今日は早く酔っぱらっちゃって。
咲　うるさいよ、泰坊、泰坊っちゃま……今日は言ってあげるよ、今夜は大事な夜だから……あんたが勝つか、私が負けるか……きっと負けるだろうね、私が……だから言ってやる。ちょうどお梅さんも、お加代ちゃんもいる。あんたのおしっこの面倒見た連中が揃ってるんだ……
泰治　（中之郷に）助けてよ、おじさん。
中之郷　お咲。
咲　なんだい、中学一年にもなって、空襲警報で、ゲートル巻いたまま眠りこんでおしっこしちゃって。
中之郷　あ、そりゃほんとだ。
泰治　参ったな。
咲　ね、あんただって苦労したのはわかるよ、でも、そんなの貧乏人みんなすることだよ……いま現在は編集者だか記者だか知らないけど、私なんか見たこともない業界紙だかなんだかのさ、でも明日はわからない。あんた、しょっちゅうふらふらよろよろしてる。この人の言うとおりだ……さすがは親戚の先生だ、よくわ

かってるよ、あんたを。

案内役　いや、ぼくがわかるのは当たり前……（反省して黙る）

咲　あのね、泰ちゃんがいま、お腹んなかでどう思ってるか、あてて見ようか……変わるには変わるだけのわけがあったんだ、男の世界の理由が、理屈が……一所懸命こっちだーって思ってこっちに命懸けで走ってたら、それは間違いだっていわれて、こんだ、あっちへ、また一所懸命……その時々にわけはあるでしょう、おばさんだってわかってるんだ。バカだけど。おじさんだってさ。

泰治　バカだなんていってないよ、おばさんのことも、おじさんのことも。思ったこともないよ。

咲　聞きなさいっ。（両手をまっすぐ前に伸ばし、握り拳を作って、自分の目の前に横に並べる）こんときには（と右拳）、こういうわけがあって、こう変わった、変わるよりしかたがなかった。（握り拳の形を変えたり、揺らしたり）で、次のときは（左拳）、また、しかたない事情があった、あんたのせいじゃない、泰ちゃんは精一杯努力したんだ……（その次は右拳を左拳の左に持って来る）

中之郷　そのへんにしとけ。しといてやれ。

咲　あんた口出さないで。男同志の庇い合いなんて不潔よ。

梅・加代　ねーえ。（コーラスの中にも同調するのがいる）

咲　（泰治に）あのね、いけないのは、起きたことを、こう見るから（握り拳を横に並べて、時間の経過に従っての事柄の連鎖を示すつもり。

梅たちに手伝わせてもいい）よ。いい？　これを、こっちから（と、自分の顔の前に拳たちを縦に並べる）見て、こう、ぺたんと押っ詰めちゃってごらん。（と拳を重ねて一緒にしてしまう）こう見たあんたって、ただふらふらぐにゃぐにゃしてるだけだよっ……

案内役と泰治、痛いらしく、頭を抱えてる姿勢がそっくり。

咲　それにさ……方針が変わるたびに、女の子まで変える必要ない

んじゃない……

中之郷　変えたくて変えたのじゃないさ。

咲　また庇う――

中之郷　振られたんだ。

梅たち、溜め息吐息。コーラスには無遠慮に笑うのも。

扉を叩く音。

咲　はいっ。

お馴染みらしい酔客　おーい、灯ついてるじゃないか、小ゆみ屋あ。

咲　（大声で）かんばんですっ。

酔客、去って行った。音楽（ピアノ）。

咲　泰ちゃん……あんた、どこまで逃げれば……人生から逃げれば気が済むのさ……はは、なあんて……お咲おばさん、威張っちゃって……へへ……（また時計を見て、中之郷に）ね、来ないね……来ないかも……どうしよう……

泰治は沈みこんだままだが、案内役は身を起こした。そのまま、まっすぐ外へ歩みだす。「小ゆみ屋」の中はいったん暗くなる。音楽の中を、案内役が舞台の先端まで進み出た。そして歩く、あてどなく。

15

案内役　歩いています、また……何のために？……帰ろう、と思います、よく……しかし、どこへ帰るのか、帰ればいいのか、それがわからない……

音楽（「夢の迷い道」テーマの変奏）のなかに、ぼやけた写真のような絵、あるいは絵のような写真のなかに、彼はいる。

案内役　それがわかる夜もあります……そうだ、一つしかなかっ

た、帰るところは……しかし、方角がわからない……おぼえていない……途方に暮れて、そのまま終わってしまう夜も……

音響と音楽が、かつての「弓屋」を――昭和十年代の下町を――どこか連想させるようなものに。前作「私の下町―母の写真」から一部の録音を使ってもいい。

案内役　（晴れやかな顔になる。足がかすかな坂道をのぼるように）ああ……（一方を向いて）こっちの角は三等郵便局、（逆を）こっちは宇部山医院……向いは大場金物店……ゆるやかな坂道を、私は歩いています……たどりついたようだ、どうやら……八つ手の鉢が並んでいます。重い一枚ガラスの戸を開ける……

戸の開閉を示す音響。他の音響は消える。

案内役　ただいま。……ただいま。……返事がありません。やがて出て来たのは、見知らぬ少女です。

見知らぬ少女　（中央の奥から登場。出来れば一尺上がった廊下の奥から、と見えたい）どなたでしょう。

案内役　泰治です。

見知らぬ少女　……（ぽかんとしている）

案内役　私は、急に不安に囚われます。……あの、泰治です、ここの息子の。……母は？

見知らぬ少女　（わかったようだ）はい、ただいま……（奥へ消える）

案内役　ほっとしました。母にさえ会えれば……（一瞬、客席側に目をやる）

中央の奥に、黄色いスポットライトの光が射す。

案内役（振り向いて）あ……

その光は、ふっと消える。「さんさ時雨」の歌が聞こえる。

案内役（途方に暮れて、うずくまる）いったい、どうしたんだ……忘れていたんです、私は……母が、もうずっと前に亡くなっていた

ことを……

「さんさ時雨」の歌声がゆっくり遠くなって行くと、照明も、音響も変わる。音楽は「夢の迷い道」か、それにつながるもの。

いつか、モク拾いの老婆と浮浪児がいる。

案内役　（気づいた）また……どうしてあいつらと、しょっちゅう出会うんだ……

鞄の中の携帯電話がちりちりと鳴る。

案内役　はい……（ほっとして）ああ、君か……いま、帰るところさ……（突然、不安）帰る……おい、君は、どこだ？　どこの君だ？……いやね私よ、って……その私は、誰だ？　頼む、言ってくれ……京王線か小田急か、それとも地下鉄の東西線か……

電話は切れたのか、混線・雑音か。案内役、呆然と立つ。

遠く流れる歌は、戦後早い時期のものだ。ガードを通る電車。

老婆と浮浪児、なにか笑い声を立てて行こうとする。

案内役　おばあさん……

老婆　（ちょっと警戒）何だね。

浮浪児　（目を光らせて構える）

案内役　いや、べつに……どこに住んでるんです？

老婆　ふふ、はは……そんなとこがありゃ、苦労はないさね。

案内役　焼け出されたのか……（大して興味はなく）どこで？……

浮浪児　（ハーモニカを取り出して、遠慮がちに吹きはじめる）

老婆　古網町。

案内役　……え？　古網町？

老婆　（もう、遠ざかり始めている）日本の真ん中の東京の、その真ん中の日本橋の、そのまた真ん中の……

二人の姿はハーモニカの音とともに消える。

案内役　ふん……（ぶつぶつと）しかし、何で俺の前にいつも……

（襟に水滴が入ったか、震え上がる。見上げる）雪か……

16

14と同じ「小ゆみ屋」。同じ夜の遅い時刻。店内には案内役を除いて同じ人物。

コーラスは加代を入れて、ここは五十年代終末を思わせる曲。

梅　そう、七年前に……七年たったら、一緒になろうって……

咲　その七年が、来たってわけよ……私、友子さんに言われてたのよ、七年後の今月今夜、

泰治　（ぶふっと吹き出す。睨まれて）ごめん。おじさん、お代わり。

咲　私も。……で、さ、どこまで言ったっけ。

梅　今月今夜よ、七年後の……それが、今夜。（咲、うなずく）ここで、その、先生って人と。

咲　そう。……（中之郷に）でも、来ないじゃないっ。

中之郷　まだ今日は終わっちゃいねえよ。夜は長えし。

咲　だって……常識的な時間てものがあるでしょ、飲み屋の客じゃないんだよ。

梅　待ちに待った夜であるはずよねえ、指折り数えて……

泰治　言ったでしょ、おばさん、だから……（梅や加代に）おばさんと賭けたんだ、借金棒引き、

咲　あんたが勝てば、ね。

泰治　勝つさ。どうして現実的になれないんだろうな、大人って。常識で判断してみりゃいいじゃない。観念やイメージで自分を誑（たぶら）かさないで、目を開けて。

咲　（梅たちは「まあ……」と感心したような声をだすが、咲は負けていない）でも、常識って人じゃないよ、あんたの姉さん。

泰治　わかるけどさ、そりゃ……ね、でも一応時間切ろうよ。

梅　ね……その先生って人、どんな人なの？　顔とか……

咲　私、会ってないのよ、それが。

泰治　おれ、すれちがってる筈なんだけど……あんまりぱっとした人じゃなかったような……（よく覚えていない、と首を振る）

加代　でも、先生なんでしょ？

咲　小学校のね、前は……友子さんとのことを中傷する人がいて、うるさいわねほんと、下町って……そいで転勤して……あとは、何にも言ってくれないもの、友子さん……

外へ、うろうろと先生が来る。こうもり傘を手に、長靴。電気は消えているが看板を見て、さて入ろうとすると、例の馴染み客が、こんな街ではよくあることで、今度は三人連れになってやってくる。口々に「おーい、小ゆみ屋……一廻りして来たぞ……レギュラーがお揃いだぞっ」など、など。

咲　うるさいわねっ、ほんとに……（ドアを開けると途端に笑顔で）ごめんなさい、今夜はね、どうしても駄目なの、（「お、いい女いるじゃない」）いるいる、けど駄目なの、また明日、明晩、ねっ……（と外へ押し戻す）

先生　（馴染み客の後ろから）あのう、

咲　だから駄目だって、ぐっぱいっ。（押し出して閉めた）

梅　いい女って……誰のことかしらね。

女たち、顔を見合わせる。押し出された先生、素直にいったん去る。音楽――

しばらく後。

咲　来ないわね……

梅　来ないわね、二人とも……

加代　友子さん、電話くらい……

中之郷　いそがしいんだ、年末だから……デザイナーなんてな。

泰治　もう一杯、あ、こんどカクテルで行くかなあ……むろん、今夜の分も、だよね、棒引き。

咲　誰に似たんだ、その性格。

先生、戻ってくる。やはりここだ、という感じで、ノック。

咲　はい……（開ける）

先生はそもそも風采が上がらない上に、今夜はジャンパーといい帽子といい、足元もふくめて、きわめて、そう、この頃から広く流行しはじめた表現を使えば、イカさない。

咲　（上から下まで見て）間に合ってます。（閉める）

先生、途方に暮れた。

案内役　（登場していて）ほっとくわけにも……

先生とドアの間に割り込んで、ノック。

咲　はい。（開けて）あら、どこ消えちゃったのかと思ってた……ま、どうぞ、ご親戚のかた、原田家の……（梅たち「ああ……」とか、適当な人達だから、適当に頷く）

案内役の身体の後ろに隠れるような感じになって、先生、滑りこんでしまう。そのままドア近くのテーブル席につく。案内役、彼を咲の目線から遮る位置に座って、注文を二人分。雪子たちが受ける。

先生、緊張してて、何も言わないので、咲にはわからないし、他の連中はもっとわからないか、言う立場ではない。

また、時間の経過を示す音楽。

咲のいらいらが最高に達しかけていたとき、ドアがさっと開く。

帽子やマント風の外套など、この当時（五十年代末）にしては最高に――シックか、それとも気障か、という姿の森泉。

咲　ああ、あなた……も、森……

森泉　こんばんわ、皆さん、森泉源五郎です。すっかり遅くなっち

まって……友子さんは？

咲　お約束？

森泉　はい、今、ここで。たしかに……

咲　じゃ、来るのね……友子さん……

加代　（喜んだ）この人が先生？……

みな、顔を見合わせる。

梅　違うみたい。

森泉　忙しいんですよ、彼女、持てて……今夜みたいなパーティだと、ぼくなんか、どきどきしちゃう、心配で……あ、ホワイトレディ、出来ます？

咲　（わからないから、即、中之郷に振る）出来ます？

中之郷　甘さ、抑えますか。

森泉　甘くして。

咲　あの、今夜のパーティーって？

森泉　暁グループのよ。

泰治　コングロマリットの……化粧品から宇宙ロケットまでっていう……

森泉　暁化産にね、はじめてデザイン室って作ったでしょ、ぼくと友子さんで、ご承知のとおり。その前、アンノーウンでもデザイン・ルーム作ったのぼくたちだし……ずっと「スター・デイ・バイ・デイ」って番組の監修、彼女担当してたから、タレントたちもわっと寄ってくるでしょ、パーティともなれば……（皆の顔を見て）ご存じない？

一同、首を振る。

咲　ご存じでもご承知でもないわ、全然……そんなに、友子さん、えらくなっちゃったの？……

森泉　（首を振る）えらいんです、彼女、そこが。

梅　へ？（皆、わからない）

森泉　裏方に徹したいっていうの。甲野友子女史なんてまっぴら御免だって。いつでも、ゼロになれるように、ゼロからスタートできるように……いいでしょう……

女たち　いいわあ。

森泉　ありがとう、ぼくもうれしい……

梅　でも、勿体ない……（佳代も）

森泉　勿体ないのよね、それはそう。賛成。

咲　あんた、どっちなのよ。

森泉　（当然のように）両方よ。（時計を見て）それにしても遅いわね、ここで会おうって約束したのに……まさか、気が変わって……（皆にかけて）そんなこと、ねえ？

誰も返事をしない。花子「ホワイト・レディ」と出すが、森泉、立ち上がる。

森泉　ぼく、ちょっと……心配だから……誰かそこまで車で送るとは思うんだけど……じゃ、ちょっと……

花子　あ、ホワイト・レディ……

森泉「あげる」と出て行く。重なって音楽。時間の経過。

この店のほかは、もうすっかり灯が落ちた感じで、ちらほら、白いものが外に時折。

咲　おそいわね。

先生　（ほとんど同時に）おそいですね……

ピアノ、所在なげに。泰治だけが、おや？と思う。

咲　（断定的に）来ないわね。

先生　（同時に）来ないかも……

咲　泰ちゃん、あんたの勝ち。ふん、男なんて……

梅　（咲の袖を引いて、先生のほうを指す）……

咲、やっと先生の存在に気づく。一同も見る。なんとなく案内役は位置を移っている。

咲　あなた……もしかして……（近づく）

先生　ええ……

咲　ご商売は。

先生　（ストレートに）百姓です。

咲　ちがうわ。（戻りかける）

先生　山内です、私……以前、教師をしておりました、F第三小学校の……

咲　あなたが……先生？　友子さんの……

先生　（皆にわっと真ん中に引きずり出される。困って、口ごもりながら）……春に退職いたしまして、Tの山奥に、少しばかりですが、土地ば手に入れて……今は、百姓です。念願の。……友子さんは、ご承知ですばって、手紙で……このところ、私も忙しくて、あまり……（しかし、微笑んで）よっぽど土いじりの性に合うとるとでしょう、毎日が楽しうて……友子さんも、そげんごとある……（急に恐縮）今日は、こんな恰好で、私……もう、山は雪ですけん……（小さくなる）

咲　じゃ、あんたも自信があるわけじゃ……友子さんと、今夜……これから、このさき……

先生　全然、ありまっせん、自信……

梅　そうでしょうね。

泰治　（姉の笑い声を聞きつけた）あ、来た……

森泉が傘をさし、その腕にしがみついた感じの（ハイヒールだ）。友子が、笑いながら来た。咲が、ドアを開けて飛びだす。

咲　友子さん……

友子　ごめん、遅くなっちゃって……

咲、森泉に傘を渡される。友子は森泉と腕を組んだまま店の中へ。

皆、うわっと迎える。毛皮の外套を脱ぐと、シックなパーティ・ドレスで、また嘆声。

隅へ戻って、小さくなっている先生。

森泉が、友子に先生のほうを指す。もちろん友子、分かっている。

友子　先生……

森泉　（先生の傍へ行って、立たせ、中央へ引っ張ってくる）……

友子　しばらくでございました……

先生　しばらく……立派になられて……ご活躍は、かねがね……

咲　（もう、わかった）何言ってるの、先生……目を見てごらんなさい……友子さんのっ……おい、泰坊っ……

泰治　わかった……わかったよ……この通りだ、お姉ちゃん（テーブルに頭を押しつけた）

梅　七年……七年会わないで……（泣き虫だ）

友子　おばあさんになりましたでしょ……

先生　（首を振る）き、綺麗です……

友子　先生も……待っててくれましたのね……

先生　は、はい……

咲が歌いだす。（例「長い旅路の……」）

皆が和する。友子と先生が近づく。

友子のほうが、ずっと背が高い。友子、威勢よくハイヒールをぬぎ捨てる。皆の歌と拍手の中に、二人、手を取り合う。フリーズ。

ゆっくりと案内役が、舞台の最前部に進み出る。

案内役　姉と先生は、健在で、いまも一緒にいます……Tという村

の、村道を遠く離れて、山の中の細くけわしい道を、息を切らしながら登って行くと、ＣＤのモーツァルトが聞こえてくるでしょう……木の枝にスピーカーを括りつけた下で、先生が鍬をふるっています。あれから、一日も飽きたことがないのだそうです……そして姉は……そう、今は何をしているか……前は土地のお嬢さんたちに、パッチワークや人形作りを……正直、わかりません、つぎつぎと新しいことに挑戦する人なので、ゼロから。（ふと、一方を見て）おや、また……

と言ったのは、ハーモニカが鳴って、例の老婆と浮浪児が、仲良く踊るようにしながら、舞台を横切って来るからだ……

雪がまた降り始めた。舞台全面に。

案内役　いまはもう、わかっています……いや、心の奥の無意識という暗闇では、とうにわかっていたのかもしれません……あれは、昭和二十年三月十日の夜明け前の、文字通り風の吹き様で……髪の毛一筋ほどの違いで……ありえたかもしれない母と、私でしょう、おそらく……夢でいつも出会う二人は。

ふいに、真っ赤になる舞台。降る雪が、火の粉のように見える。

作者の願いとしては……紗幕に――

「TO BE CONTINUED……続く……」

終わり。